

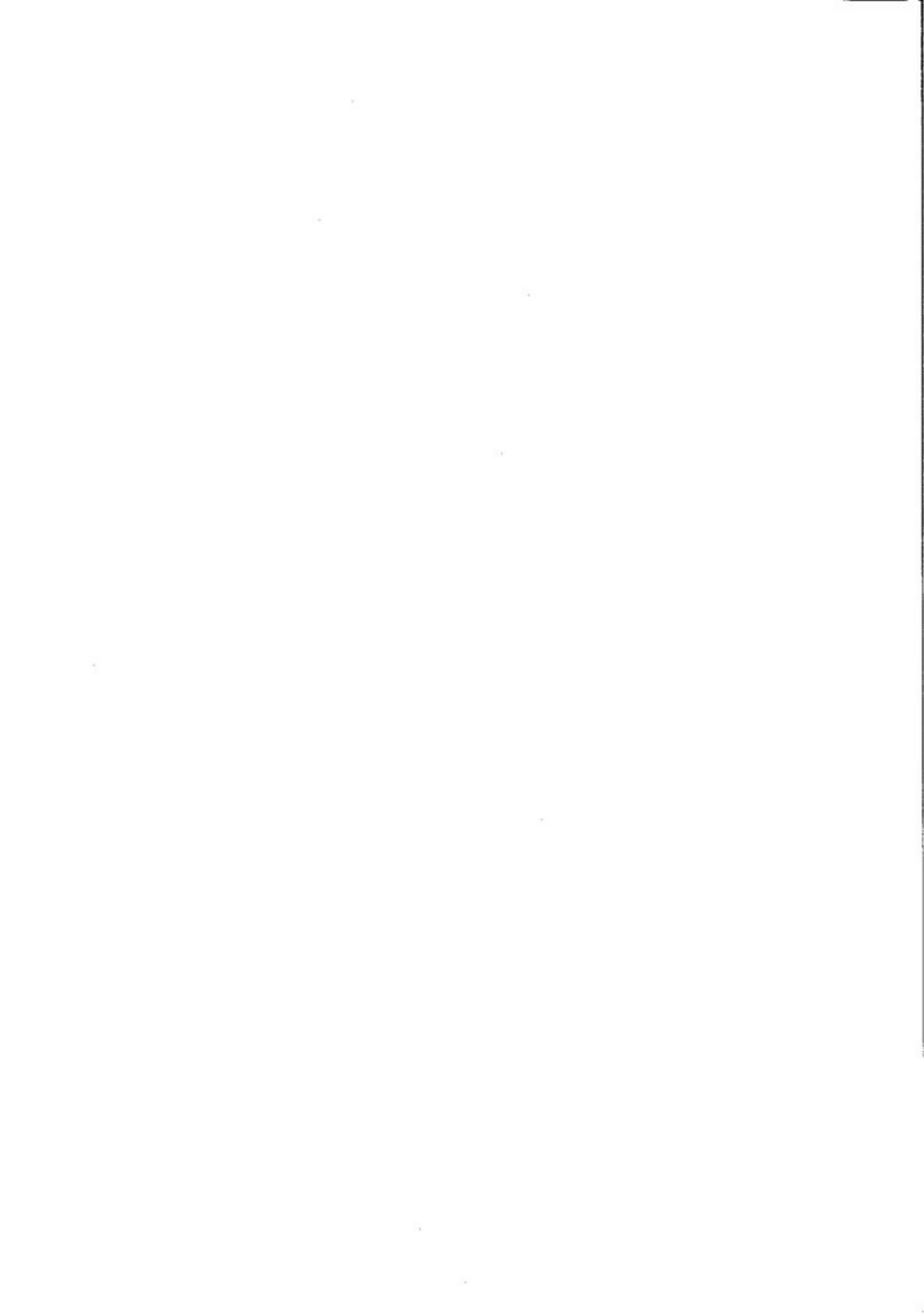
能勢町文化財調査報告書 第10冊

## 原田遺跡発掘調査報告書

弥生時代中・後期の方形周溝墓と古墳時代後期の円墳の調査

1998

大阪府能勢町教育委員会



原田遺跡発掘調査報告書 正誤表

ページ	行	誤	正
5	3	円墳2基	円墳1基
5	3	方墳1基	方墳2基
5	4	(円墳)	(方墳)
6	18	円墳	方墳
31	3	紋	文
図版19	キャブション	試掘調査	確認調査

## 序 文

大阪府の北端、能勢町倉垣地区にある原田（はらだ）遺跡は海拔270m、比高差40mほど  
の尾根の上にあります。平成4年（1992）の確認調査で弥生時代の土器や素堀りの溝、古墳  
時代の土器が見つかったことで新たに発見された遺跡です。

そして平成7年（1995）に行った発掘調査で、弥生時代中期（約2000年前）から後期（約  
1800年前）にかけて営まれた5基の方形周溝墓、古墳時代後期（約1400年前）の横穴式石  
室をもつ円墳、奈良時代（約1300年前）の古墓、鎌倉時代（約700年前）に火葬を行ったあ  
となどが次々にみつかりました。本書はその調査報告書です。

とくに注目されるのは、弥生時代の方形周溝墓が尾根の上につくられていたことが明ら  
かになったことでしょう。なぜならば、一般に大阪府下でみつかる方形周溝墓は平地につ  
くられたもので、このように尾根の上に墓をつくるのは京都府丹後地方、兵庫県但馬地方、  
岡山県美作地方など、近畿地方の周辺部や隣接した地域の墓制であると考えられていたか  
らです。また、これら丹後や美作の例は弥生時代後期のものですが、原田遺跡の方形周溝  
墓はさらに古い弥生時代中期の墓であったことも分かりました。このことは、近畿地方の  
弥生時代の墓制を考えるうえで、大変興味深い事実であると言えるでしょう。

最後になりましたが、このたびの発掘調査を実施し、貴重な成果を挙げることができま  
したのも、（株）西開発・日本国土開発（株）をはじめとする関係機関・各位のご理解と  
ご協力を得られたからにはかなりません。ここに厚く御礼を申し上げますとともに、今後  
も文化財の保護に変わらぬご援助を賜りますようお願い申しあげます。

平成10年 3月

大阪府能勢町教育委員会

社会教育課長 機 賢一

## 例　言

- 1 本書は大阪府豊能郡能勢町倉垣地区において株式会社西開発が計画した宅地開発事業に先立って実施した原田遺跡における発掘調査の調査報告書である。
- 2 現地調査は能勢町教育委員会　社会教育課　技師重金　誠を担当者として平成7年7月から同年11月まで行った。また、本書の刊行をもってすべての調査業務を終了した。
- 3 現地調査等にかかる費用は株式会社西開発が負担した。
- 4 調査を実施するにあたっては株式会社西開発・日本国土開発株式会社・瀬藤建設・東海アーナス株式会社等から多くのご援助を賜った。深謝する次第である。
- 5 本書の執筆と編集は重金がおこなった。多くの方々から数々のご教示を賜ったが、そのすべてを本書の内容に反映できなかった。何卒ご寛恕いただきたい。
- 6 本書に記載した遺構写真や出土遺物等は、能勢町教育委員会で管理保管している。

## 本文目次

第1章 遺跡の環境 ···· 1

第2章 確認調査 ···· 6

第1節 調査の方法

第2節 吉野古墳群における調査

第3節 浜湯場古墳における調査

第3章 遺跡 ···· 10

第1節 調査の方法

第2節 弥生時代方形周溝墓群

1 1号墓

2 2号墓

3 3・4号墓

4 5号墓

第3節 岡崎4号墳

1 墳丘

2 内部構造

3 出土遺物

第4節 古代・中世の遺構

第4章 遺物 ···· 25

第1節 弥生時代の遺物

1 1号墓埋葬主体内出土遺物

2 1号墓周溝出土遺物

3 2号墓周溝出土遺物

4 3号墓周溝出土遺物

5 4号墓周溝出土遺物

6 土坑10出土遺物

第2節 古墳時代の遺物

1 須恵器

2 土師器

第3節 鎌倉時代の遺物

配石遺構関連出土遺物

第5章まとめ ···· 43

第1節 弥生時代遺構群の変遷

第2節 出土遺物

## 図版目次

図版1 調査地

図版16 奈良時代古墓

図版2 1号墓1

図版17 配石遺構

図版3 1号墓2

図版18 原田遺跡弥生時代

図版4 1号墓3

方形周溝墓出土土器

図版5 1号墓4

岡崎4号墳出土土器

図版6 1号墓5

図版19 試掘調査の遺物

図版7 1号墓6

図版20 弥生時代の遺物1

図版8 1号墓7

図版21 弥生時代の遺物2

図版9 1号墓8

図版22 弥生時代の遺物3

図版10 2号墓1

図版23 弥生時代の遺物4

図版11 2号墓2

古墳時代の遺物1

図版12 3号墓

図版24 古墳時代の遺物2

図版13 5号墓

図版25 古墳時代の遺物3

図版14 5号墓周辺

図版26 古墳時代の遺物4

図版15 岡崎4号墳

図版27 石器・土製品・錢

# 原田遺跡発掘調査報告書

## 第1章 遺跡の環境

原田遺跡は弥生時代中期から後期にかけての遺跡である。岡崎古墳群は、この原田遺跡に一部重なって営まれた、古墳時代後期の古墳群である。これらの遺跡は、大阪府豊能郡能勢町倉垣（くらがき）地区にある。

能勢町は大阪府の最北部にある人口15,000人余りの町である。丹波高原の南端に当たるため、そのほとんどが山地で占められている。旧摂津国能勢郡の西半部に相当し、京都府龜岡市、兵庫県川西市・猪名川町・篠山町などに接しており、他府県に突き出たような位置である。能勢では、頂上の丸い山々の間を縫うように流れる小河川がところどころに小さな平地をつくっている。倉垣地区は町の北東部にあり南北1.5km、東西0.8kmという能勢では大きな平地の一つ（以下、盆地という）である。西の山内地区と接しており、これらは旧豊能郡歌垣村であったことから、現在でも行政単位として倉垣・山内地区と括られる場合が多い。その場合の平地の規模は、南北は変わらないが東西は約2kmということになる。

そしてそこには、いくつかの集落と安定した耕地が形成されている。

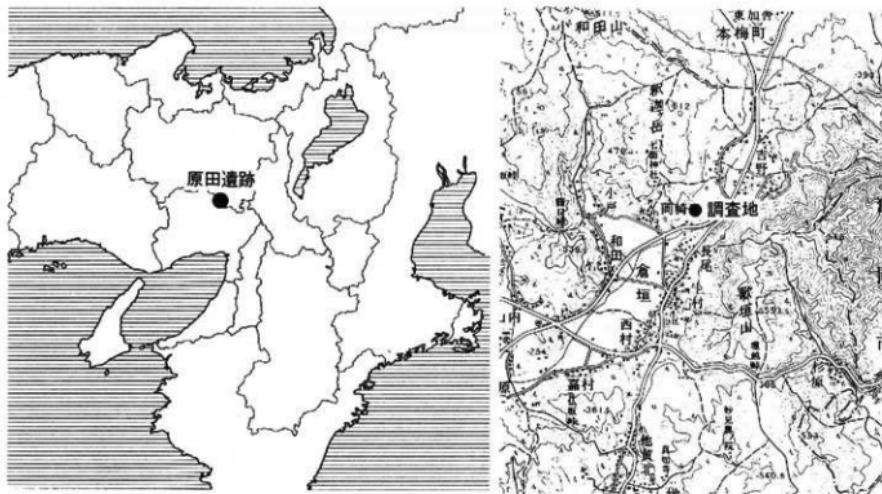


図1 遺跡の位置

盆地は、東の山地から西にゆるやかに降る扇状地で占められていて、海拔は200~230mである。盆地の西端が一番低くなっている、そこを北東から南西に向かって川幅数mの田尻川が流れる。川の両岸には氾濫原と見られるところがあるが、それは川を中心とした数十mのごくせまい範囲にとどまり、すぐ一段高い河岸段丘面となる。したがって川が氾濫したとしても、平地全体が水没しになることはなかったが、肥えた土が平地にもたらされることもなかったはずである。また、灌漑にこの川の水を利用するためには、上流で堰をつくり取水する技術と、そうやって取り入れた水をすみずみに行き渡らせるための水路ができるのを待たねばならなかつたことであろう。したがって、耕地がこの平地全体をおおうような今の景観は、かなりの年月を経てつくられてきたものとみるべきである。

そのような地理的条件は、この盆地の中の弥生時代と古墳時代の遺跡の分布にどう反映しているのであろうか。まず弥生時代の集落遺跡は、原田遺跡以外ではハイ原遺跡(10)、横町遺跡(13)、稻荷社遺跡(16)などの集落跡が知られているに過ぎない。ハイ原遺跡は近年発見されたもので、中期の竪穴住居跡群が検出された。横町遺跡は中期～後期に属する。不時発見されたため、小規模なトレンチ調査に終わってしまったが、中期から後期にかけての造構と遺物がみつかっている。稻荷社遺跡では中期から後期の遺物がみつかっている。住居跡はみつかっていないものの、集落である可能性



図2 調査区の位置（斜線部）

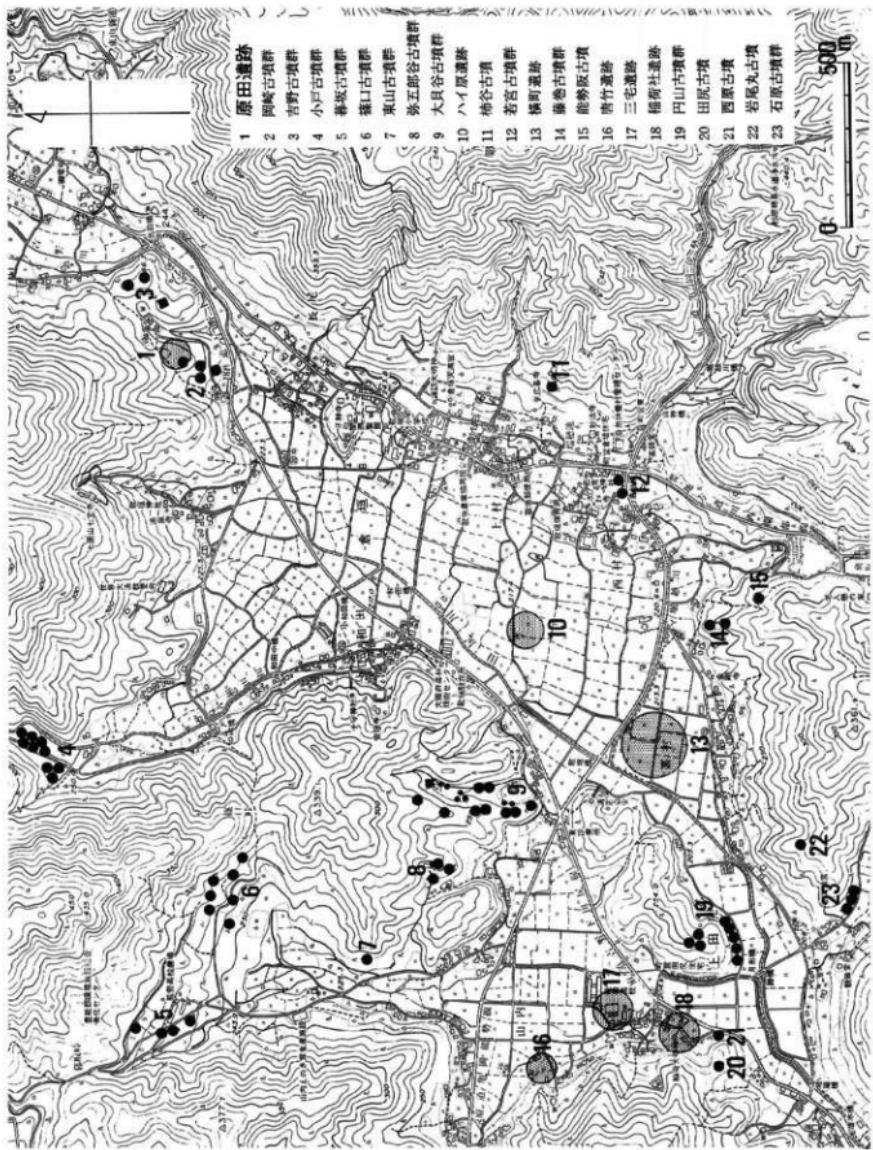


図3 倉垣・山内地区の弥生時代と古墳時代の遺跡 (S=1:15,000)

が指摘されている。これらの遺跡は、いずれも田尻川を望むところにあり、その氾濫原から一段高くなった、河岸段丘面に遺構がつくられている。ただひとつ例外は、横町遺跡に低湿地が含まれるらしいことである。

つづく古墳時代の集落跡にはハイ原遺跡、稻荷社遺跡、唐竹遺跡（16）、三宅遺跡（18）などが知られる。基本的にこれらの遺跡は、前代の立地条件をそのまま受け継いだところにある。唐竹遺跡では前期の遺物と遺構がみつかっている。ハイ原遺跡では、後期の遺物と遺構がみつかっている。稻荷社遺跡や三宅遺跡では後期の須恵器や土師器がみつかっている。

このようにみると、考古学的な調査が進んでないとはいっても、倉垣・山内地区の弥生時代から古墳時代にかけての集落の分布は希薄である。

ところで、今回の調査成果で出土した弥生時代中期の土器や、ごく初期と見られる土師器の中に他地域から運ばれてきたものがあることが明らかになったが、そのことは重要である。前者には、大阪平野部や北丹波方面でつくられた可能性の高い土器がある。そして後者は近江や東海地方でつくられた可能性の高い土器である。これらの遺物が見つかったことによって、小規模な山間地の集落といえども外の世界に通じる道があることになり、従来から能勢を説明するときによく用いられた表現、すなわち隔絶し孤立した山間地のイメージは描けなくなってきたと言えよう。

さて、原田遺跡は、倉垣盆地の北にそびえる山地から突き出た小さな尾根の上にある。上述した集落のいずれかの人々の墓地であろう。平地部との比高差は約40mである。その頂上には高低を交えながらもなだらかな面がひろがり、そこに弥生時代の方形周溝墓群と横穴式石室の古墳があった。両者は同じ尾根の上にあるが、それぞれの立地は異なる。すなわち、方形周溝墓群は尾根の付け根付近の奥まったところにつくられていた。ここは見晴らしのよいぶん悪いところである。いっぽう、古墳は尾根の尖端につくられていた。ここからは盆地のほとんどを望むことができる。同じ尾根の上につくられながら、異なる時代で立地のあり方が全く違うということは、当時の人々の墓にたいする意識を考えるうえで、示唆に富む事実とはいえないだろうか。

盆地を囲む尾根などには、河内平野ほどではないが、後期古墳を中心とする古墳群が分布している。この地区的遺跡の分布のありかたのうちで一番の特徴は、実はこの群集墳で、その規模は能勢地域では卓越した存在である。発掘調査がおこなわれたものはほとんどないが、横穴式石室が中心で、開口しているものが多い。表面観察や遺物採集などからこれ

まで明らかになった古墳についてみてみよう。

前期の古墳はみつかっていない。中期の古墳には3基の古墳から成る吉野古墳群（3）がある。比高差30~40mの尾根の上に円墳2基と方墳1基があり、5世紀代の須恵器を伴う。2号墳（円墳）からは平成4（1992）年の確認調査で鉄刀が出土した。

後期になると一気に数が増える。岡崎古墳群（2）は今回調査を実施した4号墳を含む。尾根の尖端にあり、4基の円墳から成る。内部主体は横穴式石室を中心とする。小戸古墳群（4）は両側に山が迫る、平地の一番奥まったところにある。墓坂古墳群（5）も同じような立地であるがそのほとんどが消滅してしまった。篠口古墳群（6）は南を向いたゆるやかな斜面にある。これも一部の古墳が消滅している。弥五郎谷古墳群（8）は帆立貝式古墳を含む3基の古墳からなる。大貝谷古墳群（9）は、ここでは最も多い17基の古墳から成る。石室構造や立地から後期を中心にして終末期にかけてつくられたものと考えられている。

#### 参考文献

- 「地黄北山遺跡・横町遺跡調査概報」 能勢町教育委員会 1980
- 広瀬和雄「考古資料」（『能勢町史』第4巻 能勢町教育委員会 1981）
- 「二ノ院遺跡・稻荷社遺跡 立会・試掘調査概要」（『節・香・仙』41 大阪府教育委員会1987）
- 「稻荷社遺跡発掘調査概要」（『節・香・仙』42 大阪府教育委員会 1987）
- 『泉南郡遺跡群発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会 1993
- 『山内池尻・畠垣内遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1996

## 第2章 確認調査

### 第1節 はじめに

本章では、開発事業地から除外された吉野・浜湯場古墳群における確認調査の所見を述べることとしたい。なお、本調査に移行した原田遺跡に該当する地区（M～R区）については、第3章以下で触れるので重複を避けるために本章では言及しない。

さて、約8haの事業予定地内における確認調査は平成4年5月から6月にかけて実施した。事前に吉野・浜湯場の2つの古墳群の所在がわかっていたので、吉野古墳群（B・D～F）、浜湯場古墳群（H～L）が展開するそれぞれの尾根に、幅1m長さ10～40mの調査トレンチを設定した。また古墳状の高まりがみつかっていた、もう一つの尾根にも複数の調査区（M～R）を設定した。そして、人力による掘削を行って遺物・遺構の有無の確認につとめた。

### 第2節 吉野古墳群における調査（B・D～F地区 図4～6）

本古墳群は、事前の現地踏査で新たに発見されたもので、現状では尾根上に2基の墳丘が遺存している。

1 吉野1号墳 現状では直径16mの円墳である。トレンチ調査は実施できなかったが、墳丘が明瞭に遺存する。周辺には葺石と思われる角礫が散見される。

2 吉野2号墳（B・D地区） 今回の調査の結果、良好に遺存している古墳であることを確認した。墳丘の規模は直径13mで、円墳である可能性が高い。本古墳の墳丘面中位と基底線には石列が巡っている模様で、対応する部分ではそれぞれ拳大～人頭大の角礫が並んで検出された。また墳丘北側の裾部では幅1.5m深さ0.5mの周濠がみつかった。護岸のため、2段に積まれた石列を墳丘側にともなっている。

つぎに、墳頂部では埋葬施設を検出した。木棺直葬でその主軸方向はほぼ東西を指している。木棺自身は既に腐朽していたが、土層断面の観察から推して割竹型木棺を埋葬した可能性が高い。今回の調査では埋葬主体の全面發掘は行わず、その一部を掘り下げて土層断面の観察のみにとどめたが、その際に副葬品である長さ96cmあまりの大刀がみつかった。墳頂部周辺には既掘坑も無く、未盗掘の古墳と思われる。

3 その他の調査区（E・F地区） 本古墳群が位置する尾根筋の主軸方向と、2号墳の周辺にもそれぞれ20～40mの調査区を3ヶ所設けて確認調査を行った。腐蝕土を除去すると、ただちに地山土が現れ、明確な遺構・遺物とも検出されなかった。

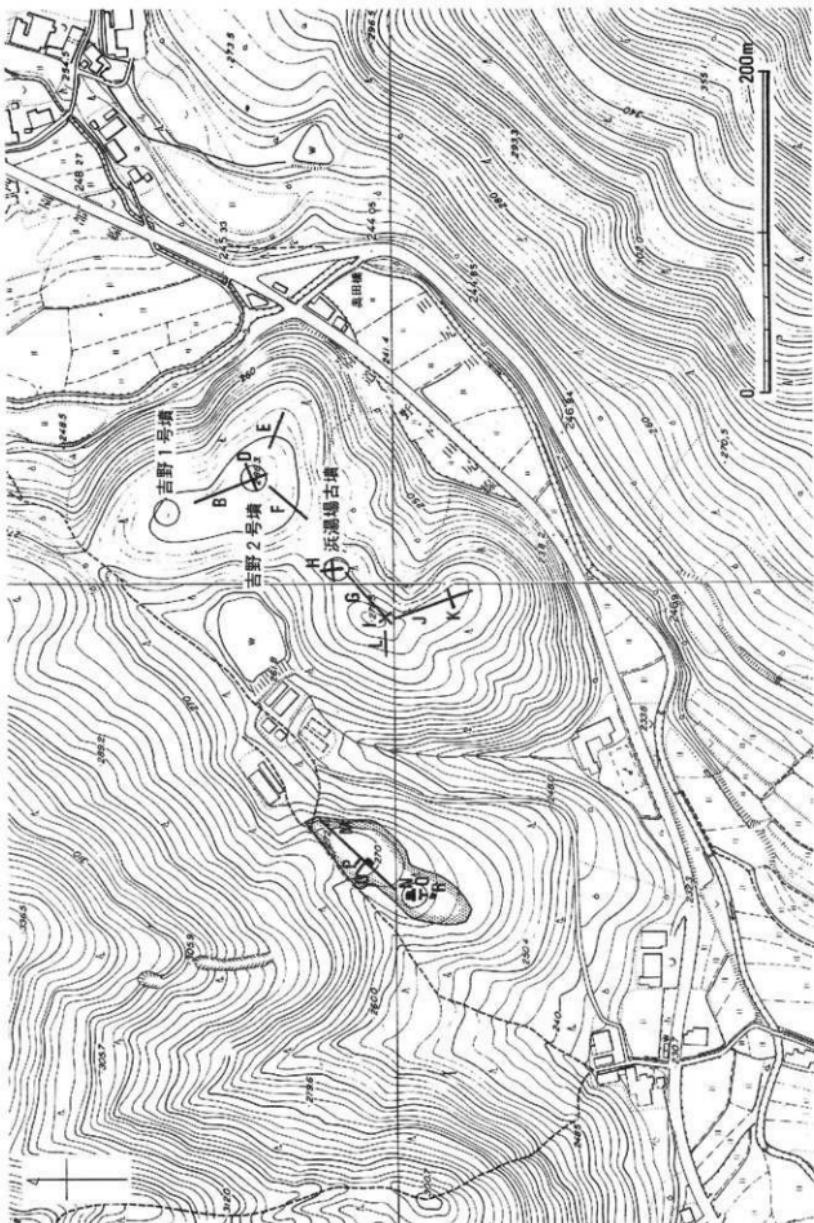


図4 確認調査トレーンチ配置図 (B~R, S=1:3,000)

#### 4 小 結 吉野

古墳群は、吉野地区を見おろすことができる尾根上に位置している。その立地や2号墳の埋葬施設の構造、そして須恵器が出土したこと等を考慮すれば、築造年代は5世紀代に遡るものと見られる。能勢町内には6世紀に属する古墳群は多数知られているのだが、それ以前に遡る例は塩古墳群のみであります。盗掘を受けていないことも考慮すると貴重な古墳群であることがこのたびの調査でわかった。

#### 第3節 浜湯場古墳群における調査（H～L地区 図4・7）

1 浜湯場1号墳 本古墳群で最も高所に位置する。調査の結果、方墳であることを確認した。現状の規模は、長辺15m短辺12mである。墳丘面の中位に角礫で築いた2段の石列を巡らせており、その遺存状態も良好であった。また墳丘裾部でも石列を巡らせていく模様である。

墳頂部では墓壙と木棺からなる埋葬施設を検出した。その主軸方

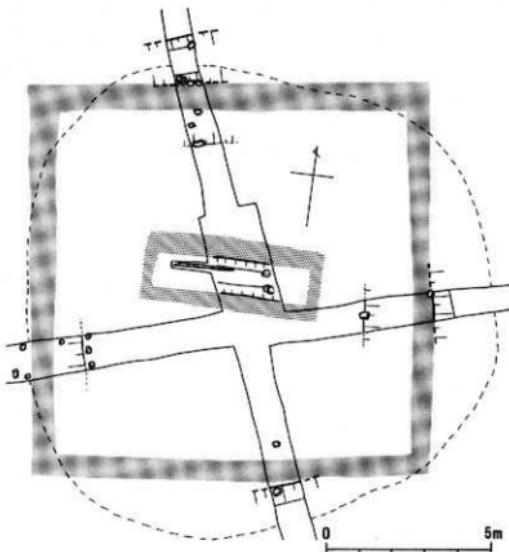


図5 吉野2号墳 平面略測図 ( $S=1:150$ ) 網ワクは推定墳丘プラン

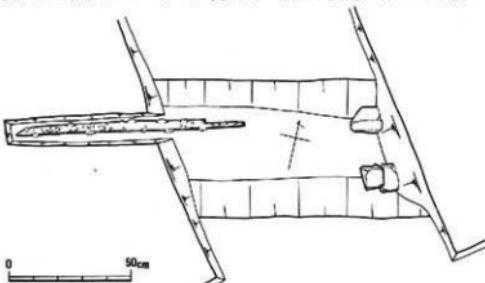


図6 吉野2号墳 主体部内直刀出土状況略測図 ( $S=1:20$ )

向はほぼ東西を指す。木棺は既に腐朽しているが土層断面の観察から推して割竹型木棺の可能性が高い。墳丘の西側裾部で須恵器壺・はそうが出土し、その年代観から本古墳の時期を5世紀代に求めることができよう。なお先述の吉野2号墳と同様に埋葬主体の全面發掘は行わなかった。

2 他の調査区 (G・I~L地区) 『能勢町史』によれば、浜湯場古墳群は上記の1号墳以外に、1号墳が位置する尾根筋の西部およびその東側に小さく張り出す尾根上で、合計3基の古墳が存在しているとされている。それらの確認のために5つの調査区を設けて発掘を行ったのだが、明確な遺構を検出するには至らなかった。また、土器等の遺物も出土しなかった。従って調査区を設定した範囲においては、1号墳のみが単独で存在する可能性が高い。

3 小結 注目されるのは、1号墳が外護石列を巡らす方墳であったことである。出土須恵器の年代観から推して5世紀代に築造されたとみられるが、このような形態をとる5世紀代の古墳は、能勢町内に限って言えば、先述した塩古墳群の中でも最古と目されている、塩山7号墳が知られているに過ぎない。最近の大坂府下での調査例も類例が少なく、その良好な遺存状態も考慮すれば、非常に貴重な古墳であると言えよう。

また、隣接する吉野古墳群がほぼ同時期と見られることや、それぞれの位置関係から推して、吉野1・2号墳と浜湯場1号墳の計3基の古墳は、同一のグループを構成していると考えておきたい。

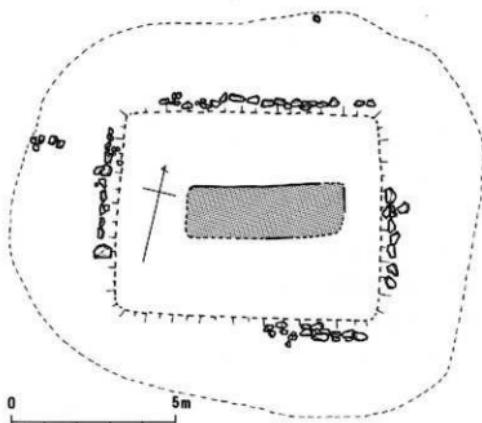


図7 浜湯場1号墳 平面略測図 (S=1:150 線部は主体部の推定範囲)

## 第3章 遺 跡

### 第1節 調査の方法（図8）

原田遺跡の発掘調査は、造成工事によって削られる海抜265m以上の部分について実施した。そのため調査対象は最大で南北120m、東西40mの規模となった。

調査区の地区割は、任意に尾根の主軸の方向を基準とする一辺10mの区画を設定し、これを遺物の取り上げや遺構の検出の単位とした。尾根の継断方向をアルファベット大文字（A～L）、横断方向をアルファベット小文字（b～f）で表記し、それらを組み合わせることによって地区の名称とした。

掘削については極力人力によった。しかし、表土層など地下遺構に影響しない程度の掘削についてはゴムキャタピラを装着した小型のバックホウを導入した。遺構の図化は、調査区の平面図についてヘリコプターによる写真測量を行い、1/100の全体平面図・等高線図を得た。また個別の遺構はその都度任意に実測の基準杭等を打設して、現地で1/10ないし1/20の図面を作成した。

### 第2節 弥生時代方形周溝墓群（図9～15：図版2～14）

弥生時代中期中葉から後期に営まれたものである。不確実なもの1基を含め、計5基の方形周溝墓を検出した。

1 1号墓（図10～12：図版2～9） Cc・Cd・Dc・Dd・Ec・Edを中心につかかった。

今回報告する方形周溝墓群の中心をなす遺構である。墳丘や周溝は旧状をよく残しており、見かけのプランは24m×13mの楕円に近いくずれた長方形である。ただし遺構の西北部は、里道や中世の遺構で破壊されており、その一部を検出したにとどまった。また、周溝内から弥生時代中期後葉（畿内第IV様式）に属する多量の土器がみつかった。

担当者は、調査中この遺構を一つのものとしてとらえていた。しかし、その後の検討を経て食い違う2本の溝によって区画される2基の周溝墓であったと考えるに至っている。

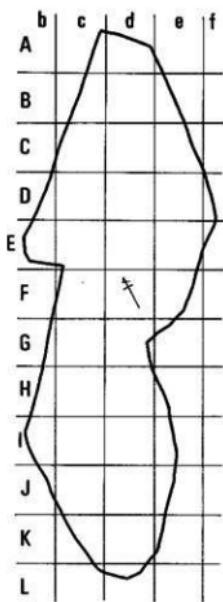


図8 地区割模式図  
(S=1:1,000)

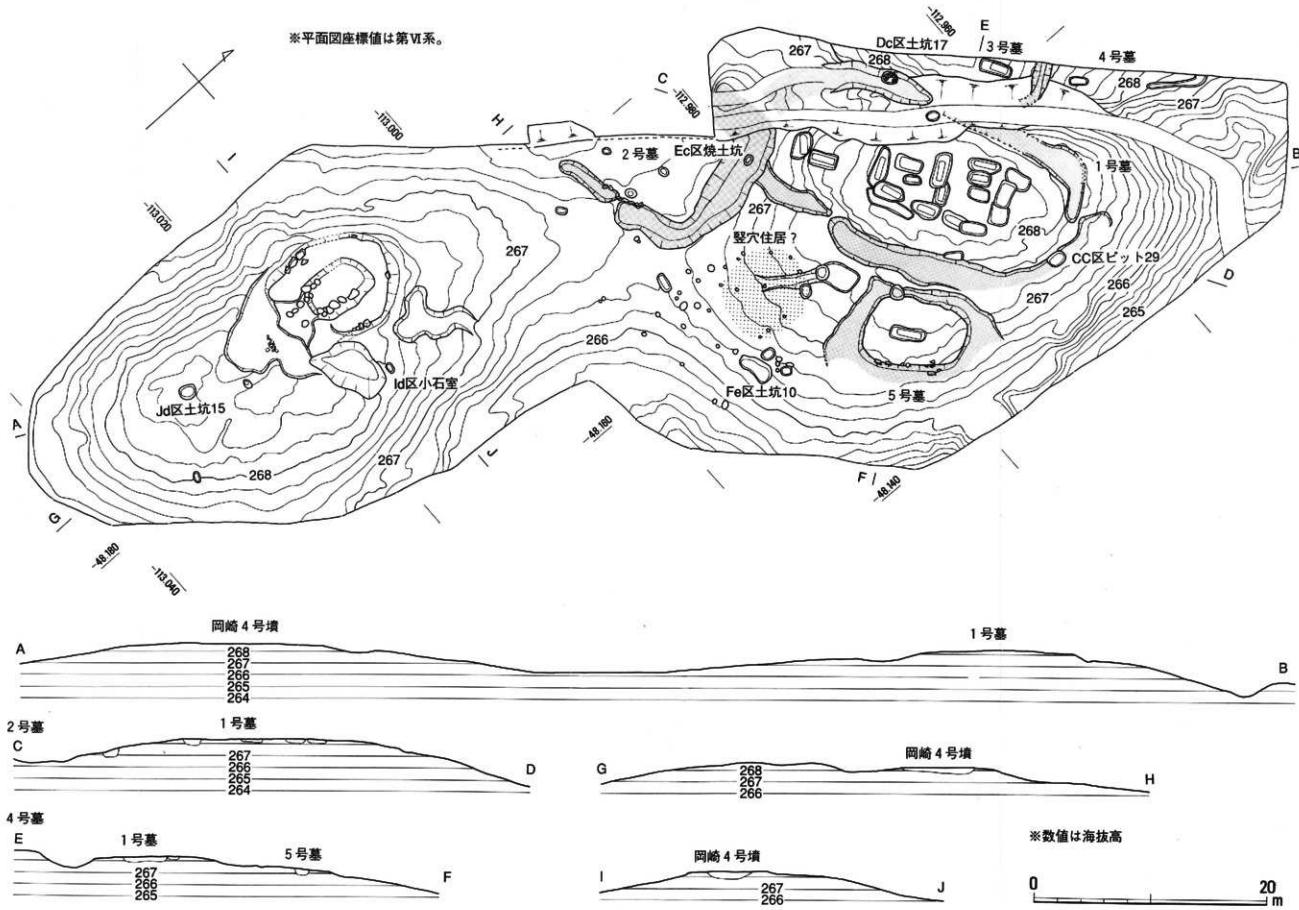


図9 調査区遺構平面図（上） 調査区断面図（下） S=1:300

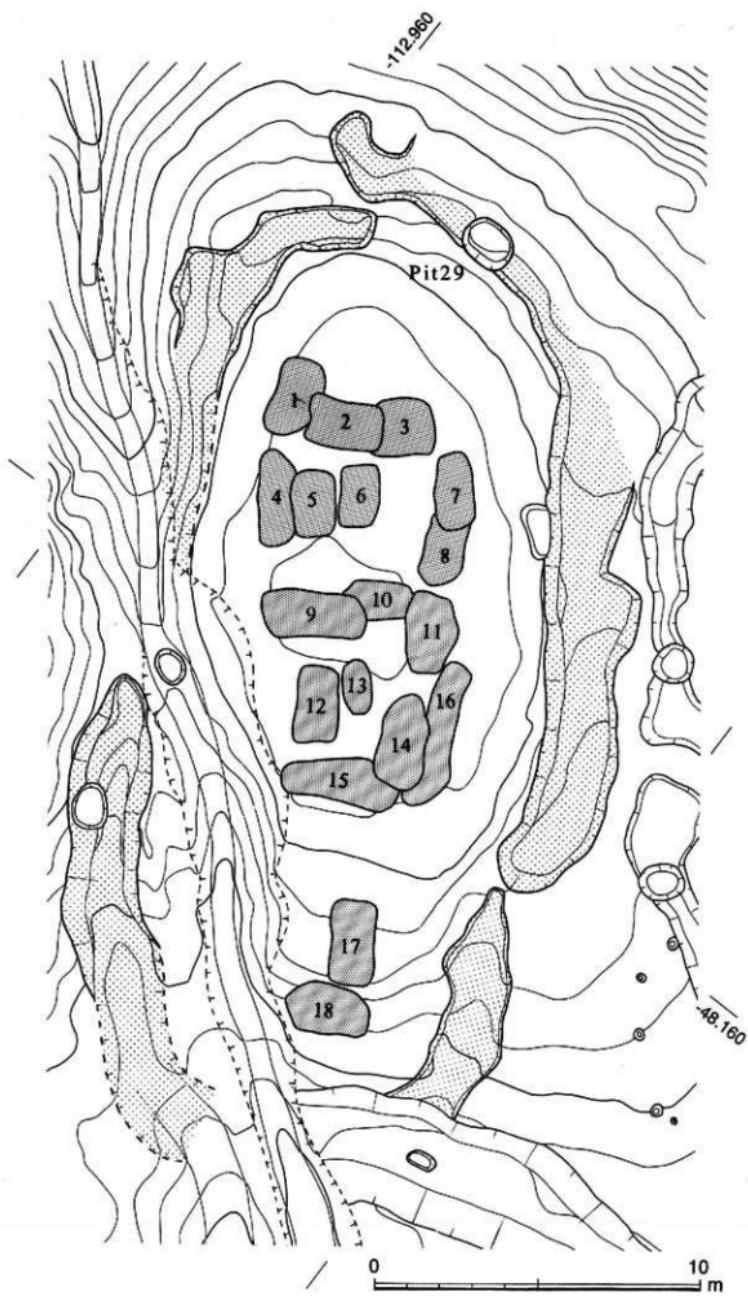


図10 1号墓 平面図 (S=1:150)

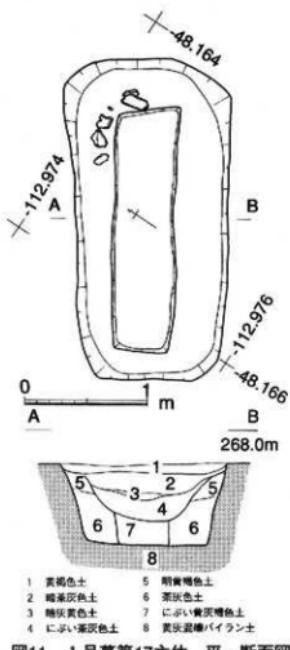


図11 1号墓第17主体 平・断面図  
(S=1:40)

mの周溝が巡っている。溝上層の埋土から見つかる土器も多かったことから、墳丘のうえに土器があり、それが朽ち果ててゆきながら、長時間をかけて土砂と共に周溝に埋まっていったことを示している。特に墳丘のコーナーにあたる場所や周溝の途切れる場所での出土が多い傾向を指摘できる。またC d区では、浅く掘られたピット29から一個体の土器が粉々になった状態で見つかった。

埋葬主体は18基みつかったが、とくに卓越した規模の墓壙はない。規模の大小によって埋葬主体を差別化しようとする意図はそこに見いだせないのである。また、墓壙の切り合ひはあったが、木棺にあたる部分の切り合ひは認められなかった。このことは埋葬されている人物の位置が、何らかの方法で識別されていた可能性を示唆する。墓壙の平面形は隅丸長方形を基本としており、長さ1.5~3m幅0.8~1.5mで深さは1m前後のものが多い。最も代表的な例として第17主体の平・断面図を掲げておく。ただ第13主体の墓壙は長さ1.5m、幅0.8mと他の主体に比べて小さく、かなり小柄な人物、恐らく子どもが埋葬されていた可

能なわち、16の主体部が集中する1号墓-A (19m×11m)と、2基の主体部がみつかった1号墓-B (9m×11m)の2基である。ただ、主体部の配置状況や周溝から見つかった土器などにA・Bの両者をはっきり区別する要素が見あたらないことも、また指摘しうる。そこで両者を厳密に区別することはせず、説明をおこなうこととした。

盛土の規模は上に記したとおりである。全体に厚さ15cm~30cmの盛土が観察されたが、大量の土砂を運びいれて盛ったわけではない。また、この墓の頂上部とその斜面の間には、風化を考慮すべきではあるが、はっきりとした肩部や段は認められなかつた。東辺のみ地山を削りだして盛土の裾を整えるが、あのの裾部はそのままだらだらと周溝に続いている。このような状況から推して、この墓は原地形をほぼそのまま利用し、見かけの大きさに比べてかなり少ない人員で築かれたものであろう。

墓の南辺から東辺にかけては、幅2~4m深さ0.4

能性が高い。また礫混じり土の堅い地山をよく掘りこんでいることから、墳墓に盛られていた土はそれだけ薄かったと言える。

次に埋葬主体のみかけの配置は、L字形もしくはコ字形である。これは何らかの区画、あるいはまとまりを意識しているようにみえる。管見では岡山県下道山遺跡・中山遺跡などにこのような配置をとる

例が見られる（岡山県教育委員会『下道山遺跡緊急発掘調査概報』1977・岡山県落合町教育委員会『中山遺跡』1978）。いずれも弥生時代後期の遺構であり中期に属する本例はそれらより遅るものである。

木棺直葬墓は9基まで確認できた。しかし、木棺の痕跡は土質や土色の違いがほとんどなく、その構造まで理解できなかった。木棺の大きさは、比較的よくわかった第17主体を例にとれば、長さ2mで幅は底面で0.4mであった。木棺と墓壇の間には小石がみられた。第15主体でもそうだが、意図的に詰めたのかどうかは判断できない。

注目すべきは、いくつかの主体部の埋土から遺物がみつかったことである。第1主体からは磨製石剣が見

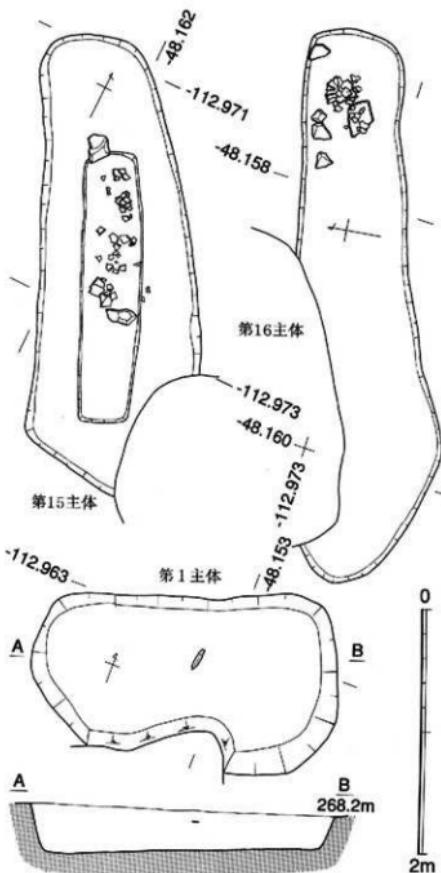


図12 1号墓主体部内遺物検出状況 (S=1:40)

つかった。石劍は造構の主軸に対して斜行し、かつ墓壙の底面からはかなり浮いたところにある。第9主体からは直径2cmの土玉が、これは墓壙の中央付近の底近くでみつかった。また第15主体から破碎された大型のおそらくは壺型土器の体部が、木棺に相当する位置で見つかった。さらに第16主体は長さ4mの長い墓壙であるが、第11号主体と接する側の墓

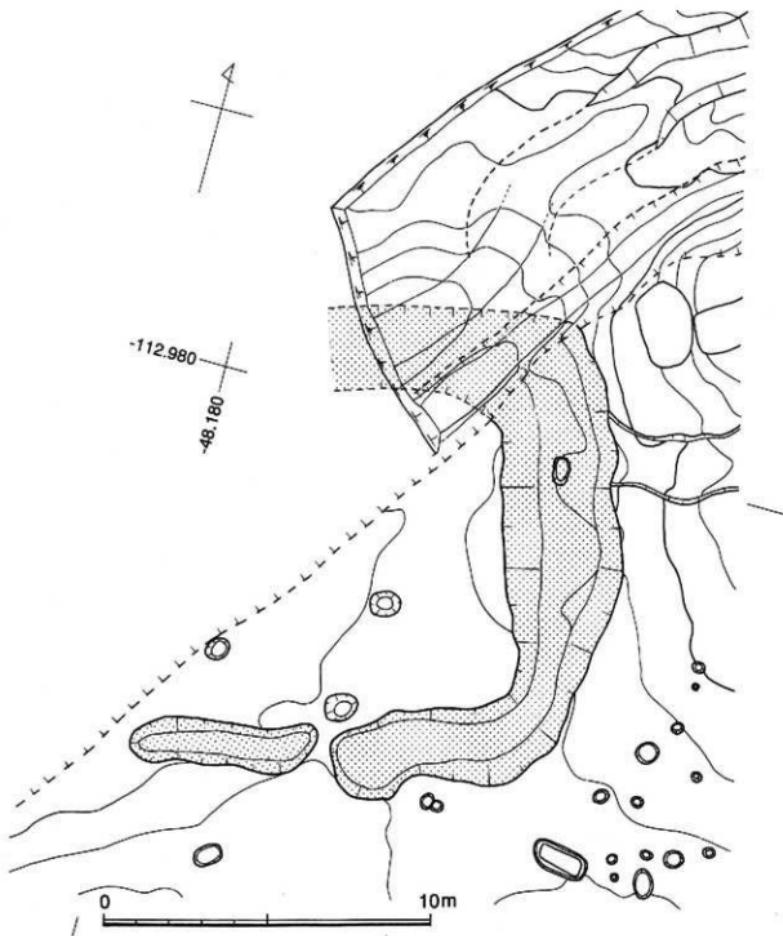


図13 2号墓 平面図 (S=1:150)

墳壙で完形の壺形土器がみつかった。

これらは偶然埋土に混入したものではなく、埋葬の際墓壙に埋められたものであると判断される。墓壙や木棺内部から土器が見つかる例は「墓壙内破碎土器供献」として近畿北部とくに但馬・丹後地域で多く報告されている〔肥後弘幸氏が「丹後の弥生の墓」（『丹後の弥生社会を斬る』第4回加悦町文化財シンポジウムレジュメ）で事例を集約している〕。それらの報告によれば後期初頭から前半が盛期であるという。ところがこの1号墓で確認されたものはいずれも中期後葉の土器を伴っている。仮に同じ墓制となれば本例が最古ということになろう。

2 2号墓（図9・13：図版10・11） 南北14m、東西15mで、全体の約1/2を検出したが、墳丘は残っておらず、埋葬施設はみつからなかった。周溝内から弥生時代中期後葉（畿内第IV様式）に属する多量の土器がみつかり、1号墓と同時期の遺構である。ただし、本遺構の周溝が1号墓の周溝を切っており1号墓の造営後に2号墓がつくられている。

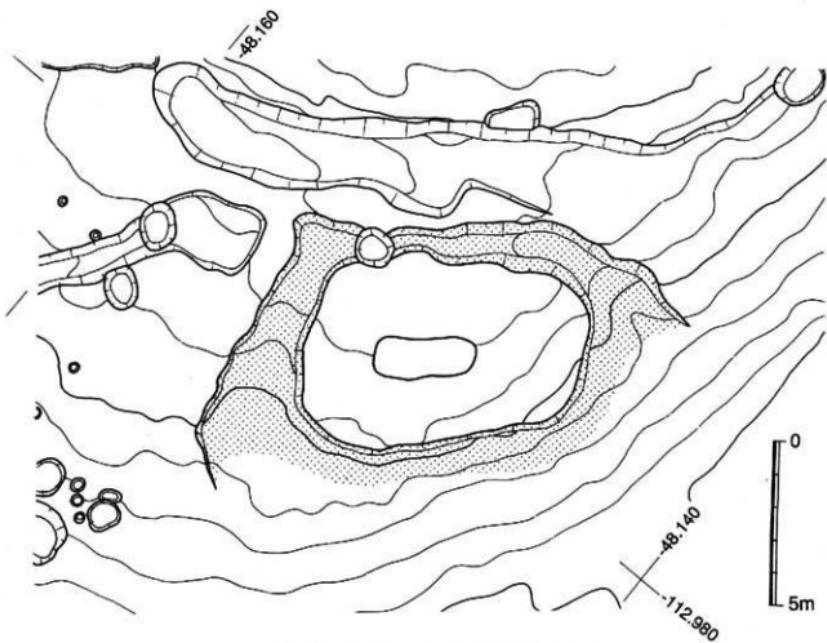


図14 5号墓 平面図 (S=1:150)

3 3号墓・4号墓（図9：図版12） 1号墓の北側に接しているが、どちらも旧道の付け替えに伴う削平で破壊が著しい。とくに、4号墓として認識した区画のプランは不明確である。この二つの墓は幅2m深さ1mの溝で画される。ここから、弥生時代中期中葉（畿内第Ⅲ様式）の土器がみつかった。埋葬施設は3号墓で木棺直葬墓1基がみつかった。遺物は無かった。

4 5号墓（図9・14・15：図版13・14） 1号墓の南側に接する。平面形は9m×6mの隅丸の長方形で、厚さ15~30cmの盛土が観察された。本遺構は隣接する1号墓の方向に合わせて構築されている。周溝も共有しておらず、この墓の造営にあたっては1号墓の存在が意識されていたのであろう。墓の北辺から西辺にかけて幅1~2m深さ0.3mの周溝が巡っており、弥生時代後期（畿内第V様式）の土器がみつかった。東辺と南辺には溝は無く、地山を削りだして墳丘の裾を成形している。また南辺の肩部には石列があり、40cmほどの角礫を一列並べて墳丘の区画を明確にしようとしたらしい。

埋葬施設は木棺直葬墓1基のみが墳丘の中央に配されている。墓廣は長さ3m幅1mでそこに長さ2m幅50cmの木棺を納めている。底面に一边40cmほどの扁平な角礫が据えてあったが、木棺のレベルを合わせるために置かれたのであろうか。

この5号墓は埋葬主体がその中央に1基しかなく、多くの埋葬主体が集中する1号墓のありかたとは対照的である（図版14）。また主体部から遺物は出土しなかった。こうした事実は、本遺跡において中期の墓制が後期には連続しなかった可能性を示唆していると言える。

なお5号墓の西南に隣接して、ピットや土塁が集中する個所がある。（図版14）現段階では堅穴住居とそれに付随の遺構ではないかと考えている。これら遺構群のうち、Fe区土坑10からは在地産の土器とともに、能勢地域ではじめて搬入品の東海系土器（S字口縁甕）がみつかったことが注目される。

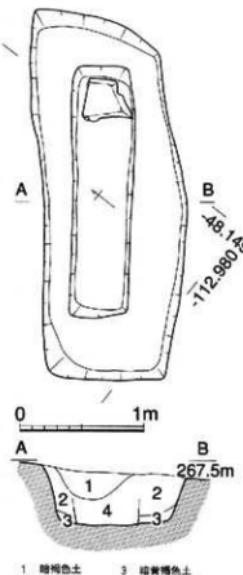


図15 5号墓 主体部平・断面図  
(S=1:40)

### 第3節 岡崎4号墳（図16・17：図版15）

平成7年に行った確認調査で新たに発見された古墳である。横穴式石室を有すると考えられたものの、石室はかなり破壊されていたことが判明していた。墳丘も崩れて変形しており、遺存状態はよくない。

1 墳丘 遺存していた外護列石のプランをもとにすると、直径11m前後の円墳であったと思われる。調査前は基底部で長径17m短径12mの橢円を呈していた。封土の高さは約2mほどあったが、石室にあたる中央部分は大きく落ち込んでいた。基底部の東西、中央

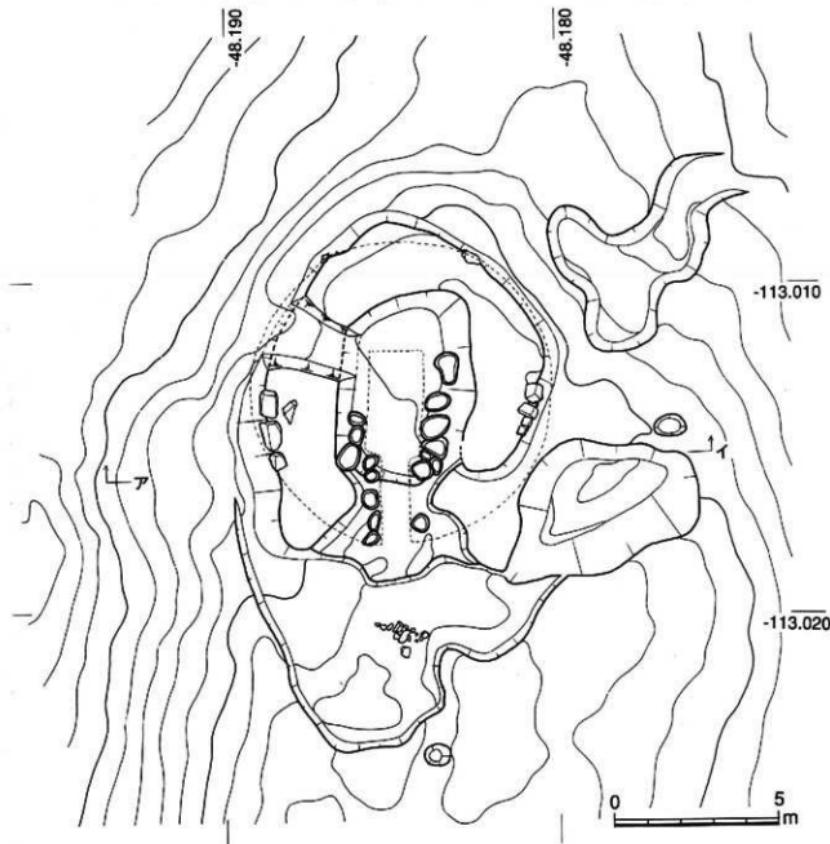


図16 岡崎4号墳 平面図 (S=1:150)

よりやや前庭部寄りに外護列石が残っていたのが注目される。花崗岩が用いられているが、ちょうど対照する部分が残っていることと、裾部の他の箇所には抜き取り痕が認められなかったことから、この列石が墳丘の裾を全周していた可能性は低いと考えられる。

表土層を除去すると高さ1.5m前後の墳丘が遺存していた。墳丘は盛土であるが、その裾部は地山を若干削って形を整えた可能性がある。盛土は周辺の灰色系土を盛り上げており、それに地山土である花崗岩起源のバイラン土や白色礫が混入しているのが観察された。また墳丘盛土の最下層には旧表土に相当する黒褐色土層の薄い堆積が認められる。

周溝 明確に周溝と言えるものはない。古墳南側の前庭部付近から東側にかけて浅い落ち込みがあり、あるいは周溝に相当する部分なのかも知れない。そこからは石室内にあったはずの多量の土器が見つかった。なお、西側および北側は地山を削って墳丘の裾を整えている。

2 内部構造 石材がすべて抜き取られており想像の域を出ないが、ほぼ真南に開口した両袖式の横穴式石室が内部主体であったと考えられる。平面形の規模は石材の抜き取り痕からの推定であるが、全長は約6mで玄室部は長さ約3.2m幅は1.5m、羨道部は長さ約2.8m幅1mである。これは町内の同時期の横穴式石室で比較すると野間中古墳群A-3号墳とはほぼ同じ規模である（大阪府教育委員会『野間中古墳群発掘調査概要』1992）。

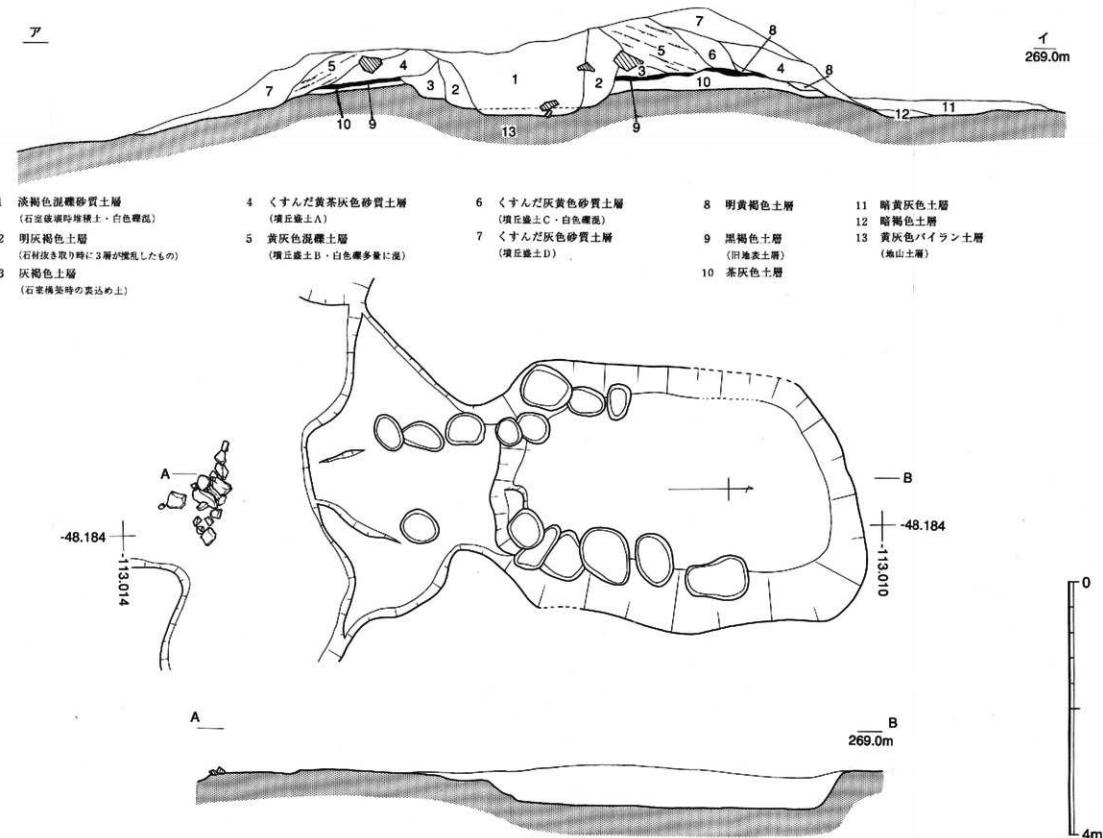
玄室部、羨道部とも床面の石材は一切残っておらず、副葬品も全く見つけることはできなかった。注目されるのは玄室部床面のレベルが羨道部のそれから明瞭に一段下がることで、その比高差は40cmほどであった。また、羨道部床面のレベルも玄門部に向かって徐々に下がる傾向を指摘しうる。なお、排水溝の存在を窺わせるような痕跡は認められなかつたが、もともと伴つていなかつた可能性が高い。

3 出土遺物 前庭部から墳丘東側にかけての浅い落ち込みから、副葬品と考えられる6世紀代の須恵器や土師器が見つかった。金属製品などは無かった。土器の年代観は6世紀前半と後半に大別でき、埋葬時期に反映するとみられるが詳細は次章で述べることとする。

#### 第4節 古代・中世の遺構（図18～21：図版16）

古代の小石室や中世の配石遺構・焼土坑が見つかった。

1 Id区小石室 岡崎4号墳の東側すぐの位置で見つかった。長さ80cm幅60cmの隅丸方形の土坑の中に、付近で見つかる比較的扁平な亜角礫を用いて小石室を構築している。検出面からの土坑の深さは20cmである。蓋石は全く残っておらず側壁も一部の石が抜き取られている。床面に敷石は無い。土坑脇に残っていた30cm大の角礫は蓋石の一部と思われる。石



室内からの出土遺物は無いが、周辺を精査していたところ奈良時代に属する須恵器の小片が見つかっており、当該期の古墓であろう。

2 Dc区土坑17（配石遺構） 長径1.5m短径1.2m深さ20cmの不定形土坑である。埋土は茶灰土色で炭片などは見いだせなかったが、それを除去すると火熱を受けて赤く変色した20~40cmの亜角礫が残っていた。変色していたのは内側に面した部分である。土坑の主軸は判然としないが、配石のプランに注目すると、その主軸はほぼ南北方向を指している。

土坑埋土からは瓦器の小片が見つかった。墓道（？）と思われる長さ5m幅1mの溝状遺構が本遺構に取り付くように延びていたが、その一部は1号墓Bの西側周溝にあたる。

3 Ec区焼土坑（配石遺構）  
2号墓の周溝内で見つかった。検出当初は土坑の周囲の直径1.5mほどの範囲に炭混じりの黒色土が広がっていた。長さ1m幅60cm深さ40cmの隅丸方形の土坑で、その主軸はほぼ南北を指している。土坑内には直径30cm前後の角礫が置かれていたが、火熱を受け黒変若しくは赤変している。土坑の壁も

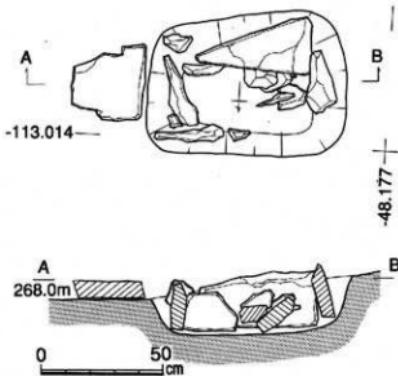


図18 Idzuka 小石室 平・断面図 (S=1:20)

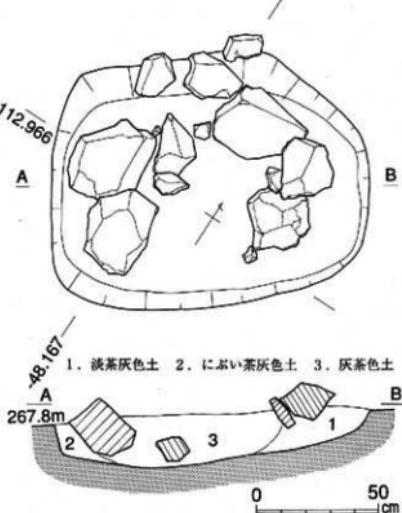


図19 Dc区 土坑17 平・断面図 (S=1:20)

同様に変色が見られ、特に黒変部は堅く焼け結った壁面が遺存していた。埋土には炭片とともに人骨と思われる骨片が多量に含まれていたが、一体分には満たない量である。骨片は火熱を受けており、この場で焼かれた可能性が高い。出土遺物は全く無いが、調査区内の他の配石遺構と類似することから同時期の遺構であろう。

4 Jd区土坑15（配石遺構） 長径1.3m短径90cmの不定形土坑である。深さは10cm前後でごく浅い。Ec区焼土坑と同様、土坑の周囲には炭混じりの黒色土が薄く広がっていた。土坑内には火熱を受けて黒変若しくは赤変した角礫が残っていた。そして炭混じりの埋土には焼骨片が多量に含まれていたが、やはり一体分には満たない量であった。出土遺物は瓦器碗・古錢・鉄釘がある。章を改めて述べるが、瓦器碗の年代観は13世紀後半を中心とする。鉄釘はおそらく木棺に用いられていたものであろう。古錢は葬送儀礼に伴って置かれた可能性が高く、本遺構も火葬が行われた痕跡と思われる。

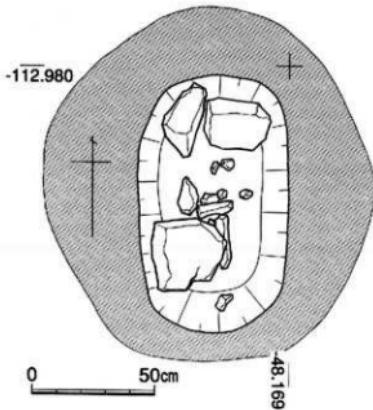


図20 Ec区 焼土坑 平面図 (S=1:20)

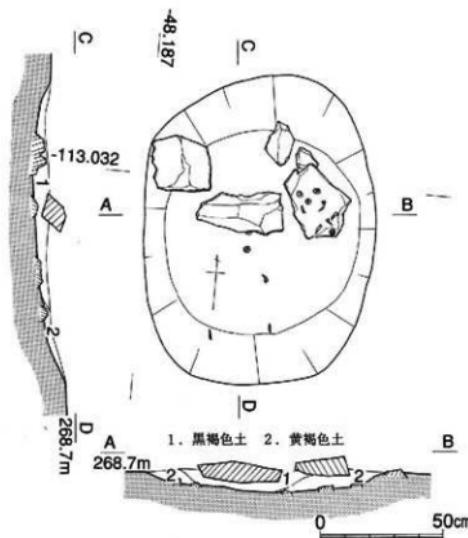


図21 Jd区 土坑15 平・断面図 (S=1:20)

## 第4章 遺物

### 第1節 弥生時代の遺物

#### 1 1号墓埋葬主体内出土遺物 (図24: 図版20・27)

第16主体出土壺（39） 丁寧に造られた土器である。器壁も薄く焼成もいい。体部外面は入念にヘラミガキされ、櫛描直線文と櫛描波状文を体部の上半と口縁部外端面に施す。また、口縁部外端面には2個一対の円形浮文を3方向に付している。大阪平野部からの搬入品であろう。

壺型土器（40～42） 40は第5主体、41は第17主体、42は第9主体からそれぞれ出土した。40は口縁部上端に刻み目を施す。42は口縁端部外面に擬凹線文をみとめる。能勢地域では一般的ではない形態で、丹波・丹後方面にその類例を求めるべきか。

第15主体出土土器片（43） 大型の器種である。頸部以上と底部を欠くことは、破碎されて出土したことがあわせて考えると、何らかの意味あいがあるのだろうか。外面にはほぼ全面に叩き目が残る。底部付近はナデ調整がなされており、叩き目が消されている。

第9主体出土土玉（44） 壺（42）とともに出土したものである。赤褐色で、胎土には砂粒を含み、粗い。中央の穿孔は焼成後行われていた。

第1主体出土磨製石剣（45） ごく一部が欠けているがほぼ完形である。剣身に対し直角の間（まち）は、その両端が面取りされる。間から上部へ約1/4のところで剣身がわずかに薄くなっており、ここまでが柄にあたるのであろう。刃部の中央には鎬が認められるが、先端にいくほど明瞭ではなくなっていく。あるいは研ぎ直しを行ったのであろうか。シャープな印象の石器であり、十分武器として使用できたと考えられる。

#### 2 1号墓周溝出土遺物 (図22 1～3・7 図25～27 図版20・21)

壺形土器（1～3・46～54） 1は口縁部外端面に刻み目を施す。2は無頸壺。3は長く真っ直ぐ延びる頸部をもつが、内面には成形の際にできた明瞭な絞り目が残る。46は頸部をめぐる粘土帯に指頭か棒状の工具を押圧した文様が付されている。体部外面のハケメは、底部から1/4までを密に、それ以上を粗く仕上げている。47・51は頸部が短いためあるいは壺とすべきかも知れないが、文様があることから壺とした。いずれも櫛描波状文が肩部と口縁部内面にあるのだが、25は5～6回、51は最低3回、それぞれ分割して文様が施されている。このことから、これらの土器は静止した状態で施文されたことが判明したことは注意されよう。49は口縁部に2個一対の穿孔があり、内面にはそれぞれ円形浮文を付す。肩部にはU字形のヘラ記号を、底部には木葉痕をそれぞれ認める。50もあるいは壺とすべ

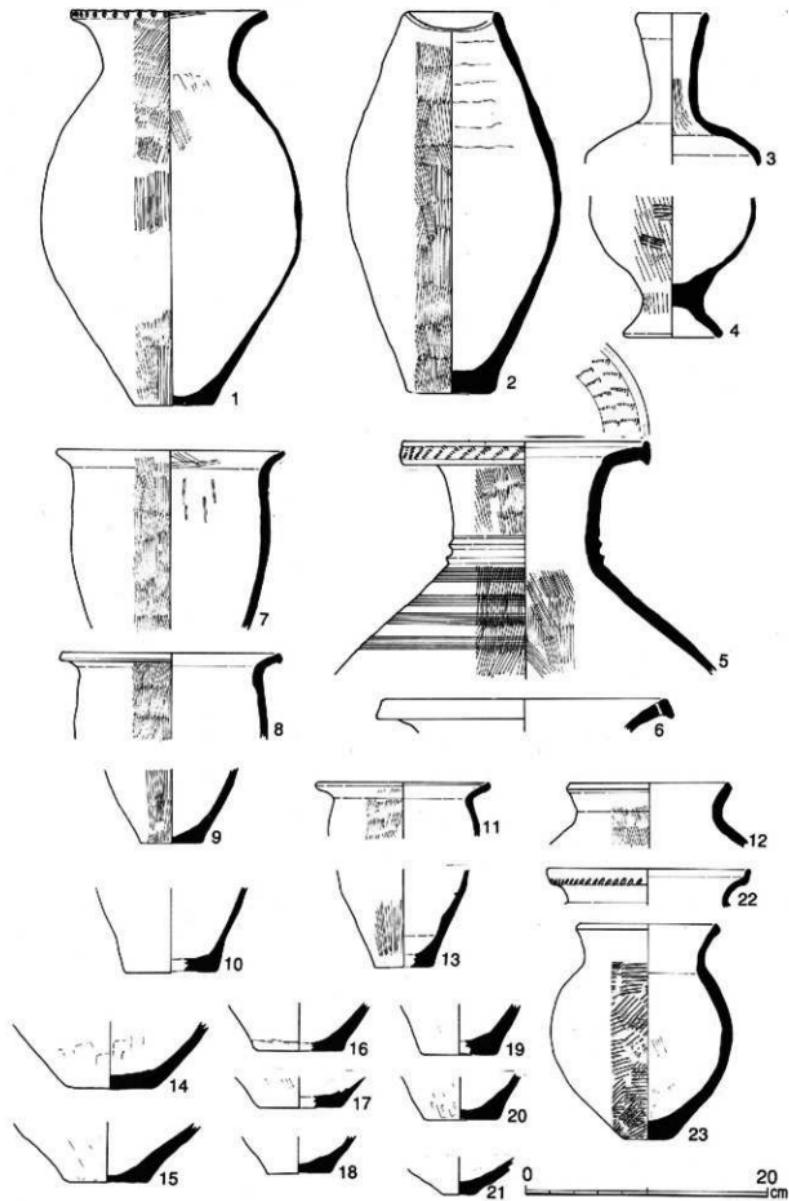


図22 確認調査 出土遺物1 (S=1:4)

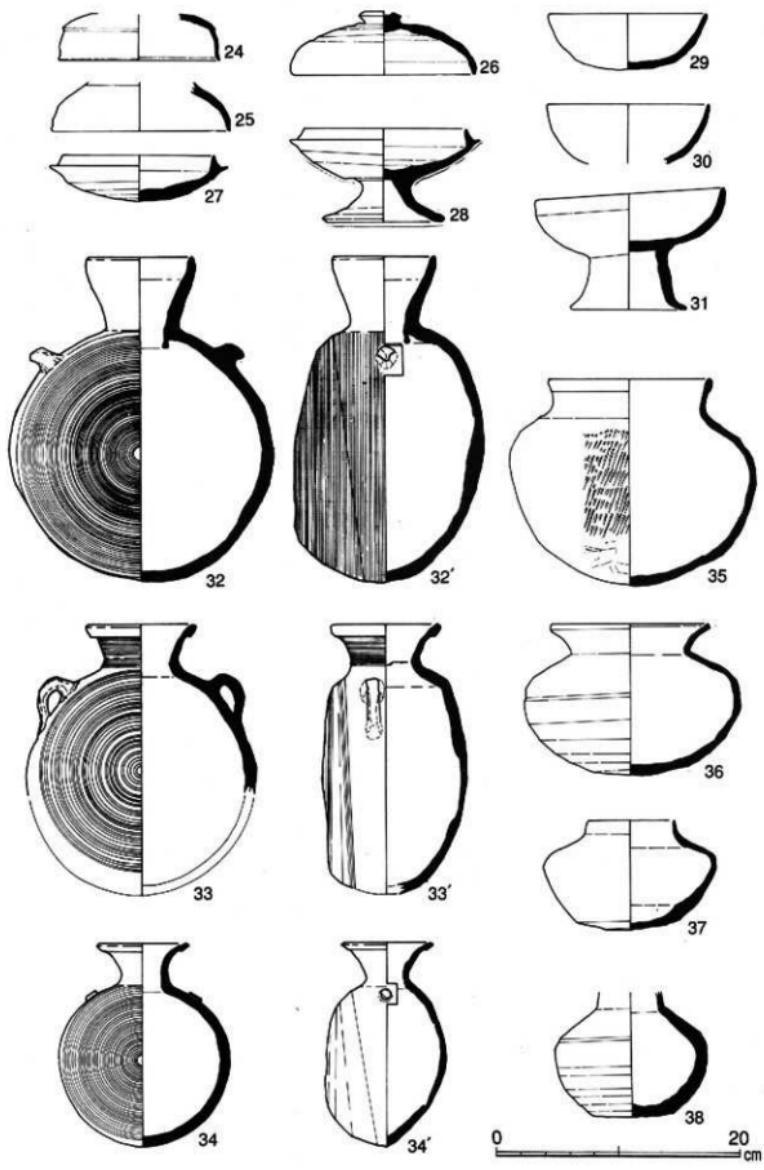


図23 確認調査 出土遺物2 (S=1:4)

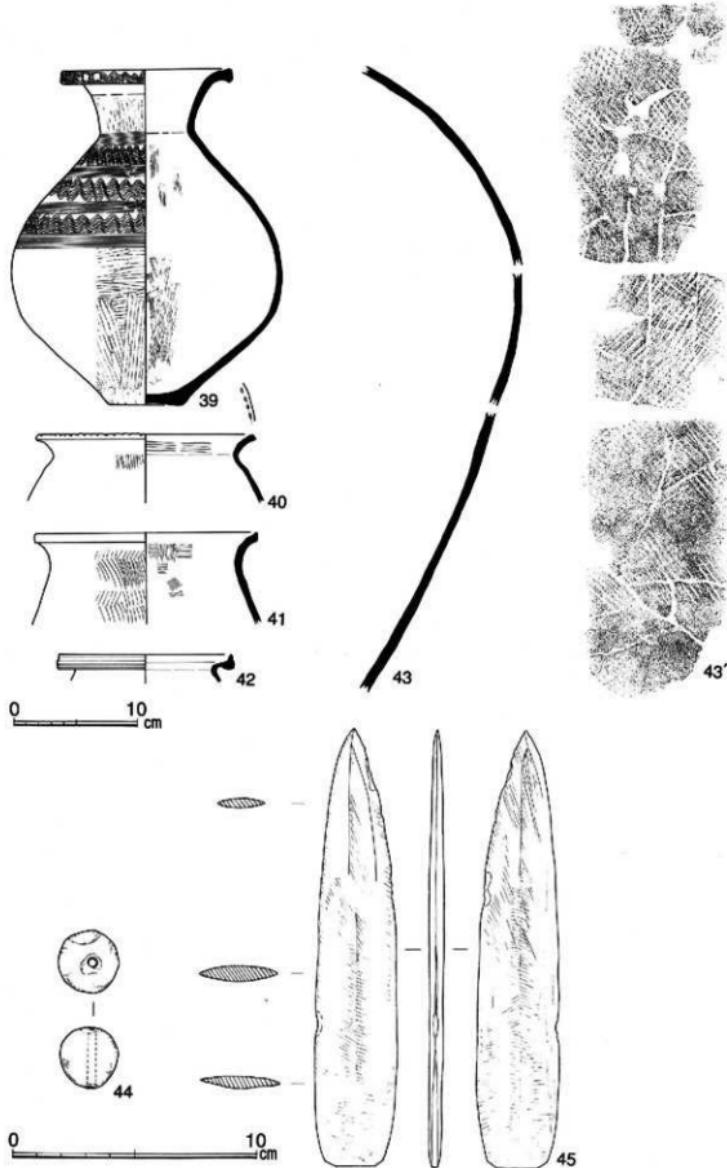


图24 1号墓葬主体内出土遗物 (39~43 S=1:4 44·45 S=1:2)

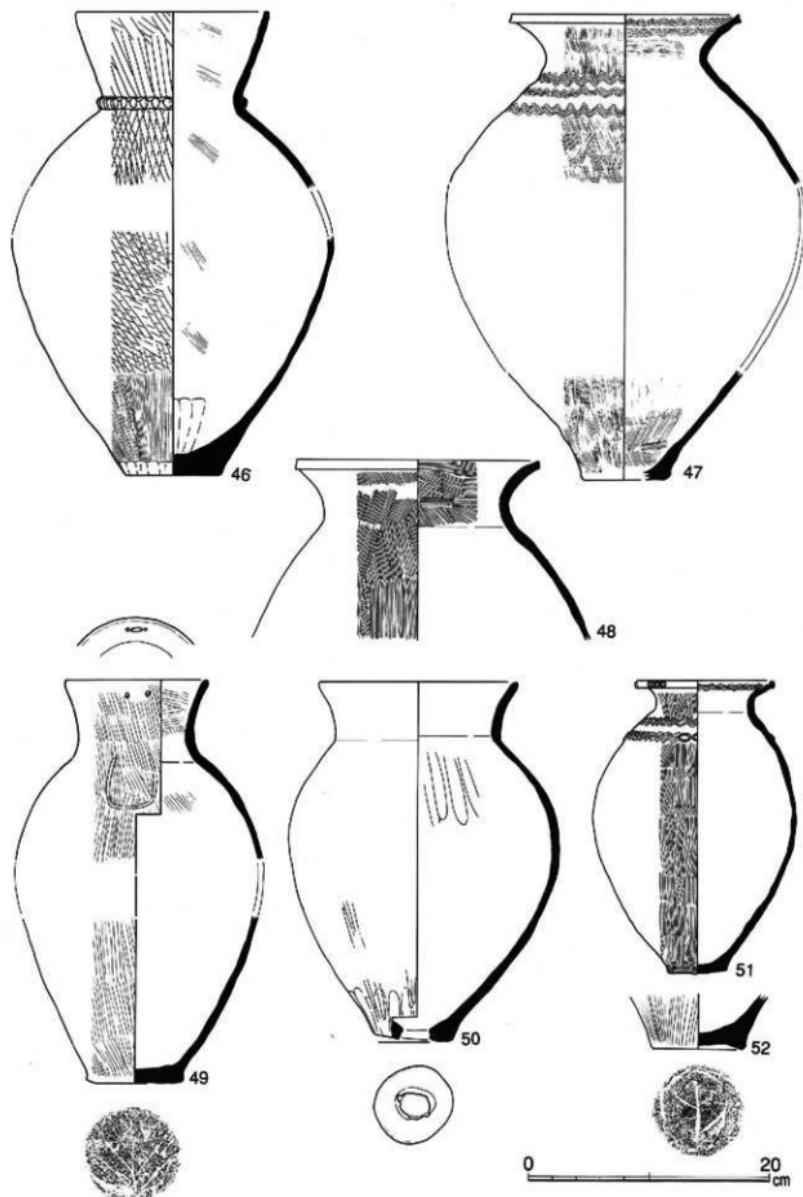


図25 1号墓周溝出土遺物 1 (S=1:4)

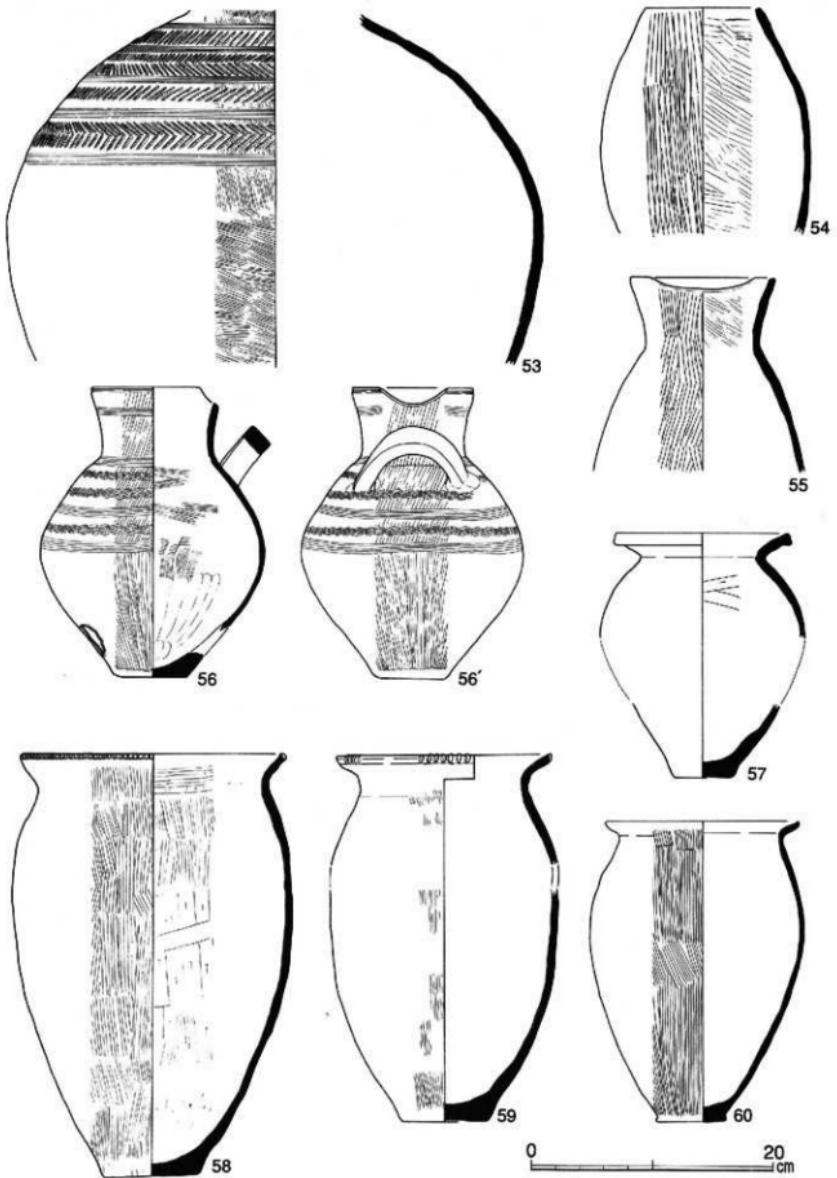


图26 1号墓周溝出土遗物 2 (S=1:4)

きかも知れないが、体部外面にヘラミガキを認めたため壺とした。底部を穿孔する。52は器種不明。底部には49と同様、木葉痕が残っているが、周囲に低く粘土帯を付け足したところの木葉痕は消えている。53は櫛描直線文と櫛描刺突紋を組み合わせて肩部に施文する大型品である。頸部以上を欠くが、胎土・焼成いずれも良好な土器である。調整は外面上部はミガキを思わせるような丁寧なハケ、下部は細かいハケ。そして内面は継位の丁寧なナデを認める。54は無頸壺。

**水差型土器 (55・56)** 55は口縁の1/3ほどを抉ることから水差型土器にふくめた。56は把手を付すタイプである。外面は全体に細かなヘラミガキを施したうえに、櫛描波状文と櫛描直線文を組み合わせて肩部上半と頸部に施文し、口縁部外面には一条の凹線文を巡らす。把手は土器の内側から挿入され、接合部をナデ付けてから施文している。また底部すぐ上の部分が穿孔されている。

**壺形土器 (57~60・180~184)** 57・181は内面にケズリ調整が認められる。58は口縁端部に刻み目を密に施す。内面調整はハケメとともに明瞭なケズリも用いられている。59は口縁端部に施される刻み目は5~7個を1単位とするもので、6単位で一周する。60は口縁部外端に面が無く、わずかにつまんだように丸く終わっていることが注意を引く。182は口縁端部に刻み目を施す。砂粒を含み胎土は粗い。

**底部片 (185~187)** これらは器種不明。186は底部すぐ上の部分が穿孔される。

### 3 2号墓周溝出土遺物 (図22 4・5・8・12・14・20~23 図28 61~68 図版26・29)

**壺形土器 (図22 12 図28 61~65)** 12は短く外反する口縁部で、その端部は面を持つ。61の口縁部も同様の形態だが、端部外面に刻み目を施す。胴部の最大径はやや下がり気味である。62は口が広く短く外反する口縁で、その端部はわずかに上下に肥厚して面を

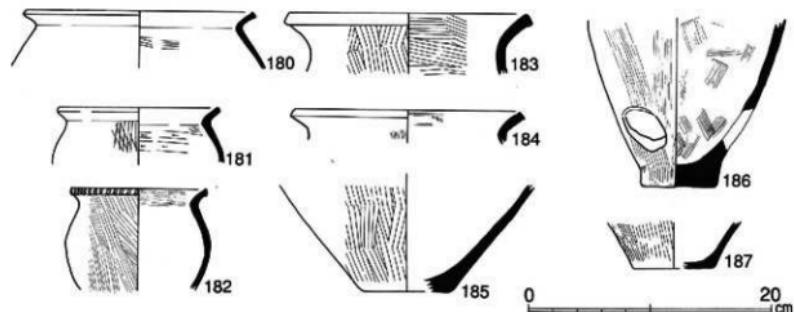


図27 1号墓周溝出土遺物 3 (S=1:4)

持ち、外面に幅の狭い櫛描波状文を2条ほどこす。短い頸部から肩部かけては、幅のひろい櫛描直線文と櫛描波状文を組み合わせた文様をほどこす。63もほぼ同様の形態であるが、口縁端部は下方に延びて面を持ち、凹線文がめぐる。外面はヘラミガキを行ったあと、櫛描直線文が施されている。64は長い頸部と大きく広がる口縁を持つ。口縁端部は上方に肥厚して面を持ち、凹線文がめぐる。口縁内面には櫛描刺突紋が施され、頸部にも櫛描刺突紋と櫛描直線文が組み合わせて用いられている。65は頸部から真っ直ぐ立ち上がる口縁で、その端部に刻み目を施す。内外面とも粗いハケメで仕上げる。

**水差形土器（図28 67）** 先の56と比較すると、腰の下がったプロポーションのこちらの方が大阪平野部でよく見かけるタイプである。真っ直ぐ立ち上がる頸部から口縁部にかけて3条1単位の凹線文をめぐらす。肩部は密にヘラミガキされたあと、継位の櫛描流水文が施されている。なお、この流水文は把手接合部をナデ付ける前に施文されている。

**高杯形土器（図28 68）** 精良な胎土で器壁が薄く仕上げられ、密にヘラミガキされた良品である。杯部と脚台部の間は明瞭な絞り目が認められる。充填されているはずの粘土円盤は脱落している。杯部口縁は本来下方に延びて面をなすのだが、そこはきれいに打ち欠かれてしまっている。脚台裾部も残っておらず、これも打ち欠かれたゆえであろうか。

**變形土器（図22 8・22・23）** 22は受口状にひらく口縁の外面に刻み目をほどこす、いわゆる近江系甕と思われる。くすんだ赤茶色で胎土は比較的精良。23は外面に明瞭な叩き目を残すものの、器壁は厚い。内面はハケ調整を行ってからナデする。

**底部片（図22 4・14・20・21）** 4は丸い胴部に短い脚台を付す。外面は粗いハケ調整を行うが、その下に一部叩き目が観察される。類例が無く、器種不明。14と20の外面はケズリ調整。21の底部はかなり退化し矮小化している。

#### 4 3号墓周溝出土遺物（図29 図版22）

**壺形土器（69～72）** 69は46と同様、指頭か棒状の工具を押圧した文様を付した粘土帯を頸部にめぐらせる。口縁端部を欠く。胴部外面のハケメは密にほどこし、内面はナデ調整。46と比較すると、胴部の最大径の位置が下がりシャープさに欠ける印象を受ける。70・71は短く外反する口縁から直ちに倒卵形の胴部に続くプロポーションを持つ。口縁部内面は横ハケ、胴部内面はナデ調整。71の口縁端部はやや肥厚気味である。72はタタキ技法によっているためであろう、胴部は丸い。外面にはハケメ調整の下にわずかに叩き目が認められる。肩部にはヘラ記号がみられるが、2本のヘラ状工具を束ねることによって描かれており、これは一種の櫛描文様とみるべきであろうか。短く外反する口縁はその端部に面を持ち、その内面には突起が作り出されている。

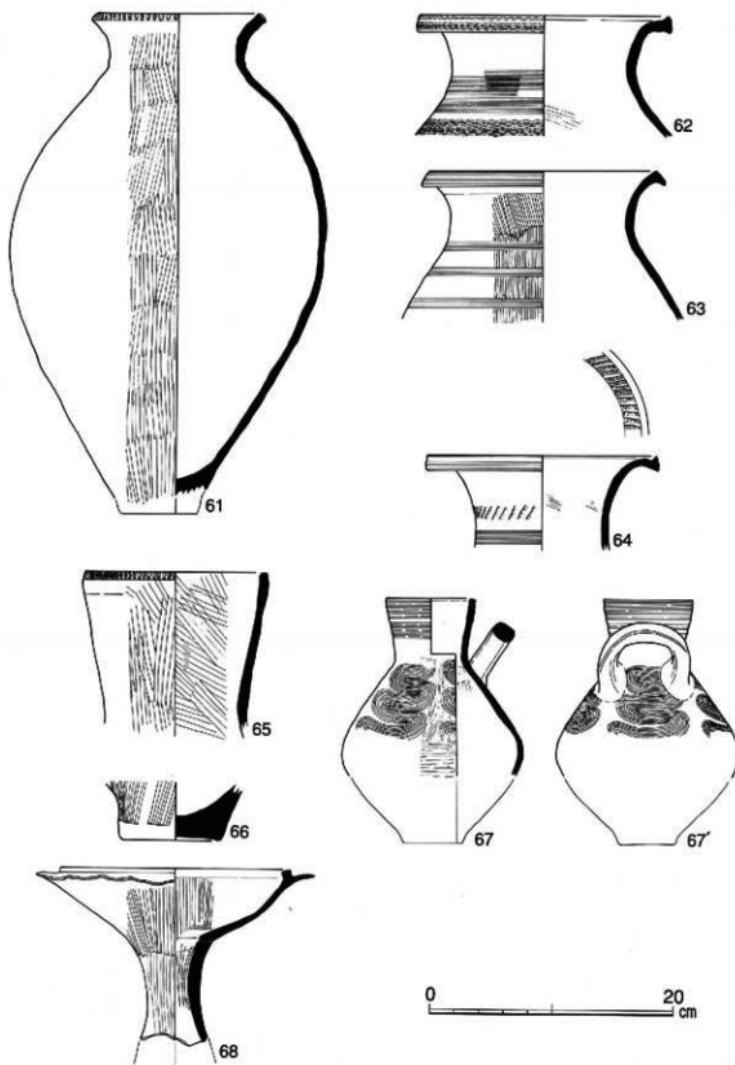


图28 2号墓周溝出土遗物 (S=1:4)

**壺形土器（73）** 72と同様にタタキ技法を確認できる。くの字に外反する口縁は丸く納められており、その端部には3個1単位の特徴的な圧痕文がめぐる。なお類似する壺は北丹波から丹後方面にかけて分布することが指摘されている（註）。

**無頸壺形土器（74）** 口縁端部がわずかに肥厚気味に広がり、面を持つ。くの字の体部で、内外面とも密にヘラミガキされている。焼成前に、口縁部の直下には2個一对の小孔を穿つ。色調は褐色味が強く、大阪平野部からの搬入品であろう。

（註）京都府北部由良川水系に出土例が多いという。（石井清司「北丹波地域」『京都府弥生土器集成』 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1989）また、この原田遺跡から北西30kmの兵庫県春日町七日市遺跡でも出土している。（旧河道2出土遺物514～520 「七日市遺跡（I）」兵庫県教育委員会・兵庫県水上郡春日町1990）

### 5 5号墓周溝出土遺物（図30 75～82）

**壺形土器（80）** 口縁部がラッパ状に広がり、その端部はわずかに丸く受け口状をなす。風化が進み器面の調整は判然としないが、外面には細かいハケメが残る。

**壺形土器（75～79、82）** 75～78は胴部外面に比較的細かなタタキが施されている。内面はハケ調整である。なお79は調整が判然としなかったが、形態から壺に含めた。口縁端部の形態は、75・79のように受け口状に開くものと、77・78のようにそのまま丸く終わるものがある。なお図化したものの他に、擬凹線文を付す口縁部の破片が少なからずあった。もし壺形土器の破片であれば、丹波・丹後方面の搬入品が存在するかも知れない。82は受け口状口縁の外面に刻み目を施す、いわゆる近江系壺。

**その他（81）** 手あぶり形土器と思われる土器片がある。肩部に当たるのであろうが、低い突帯にハケメの原体か構造の工具の先端を当て、刻み目が施されている。内面はハケ調整で、色調は白っぽい黄灰色である。

### 6 Fe区土坑10出土遺物（図30 83～86：図版23）

**壺形土器（86）** 退化した底部を持つ長頸壺である。頸部、肩部、胴部～底部の3つの部分はそれぞれ完全には接合しなかったが、胎土、焼成、調整などから1個体と判断した。精良な胎土で色調は暗赤橙色である。外面は丁寧にヘラミガキされ、内面はハケ調整される。

**壺形土器（83～85）** 83はかなり退化した底部を持つ。色調は白っぽい茶灰色である。外面は細かなハケ調整が認められるが、胴部下半部はナデによって消されている。内面はナ

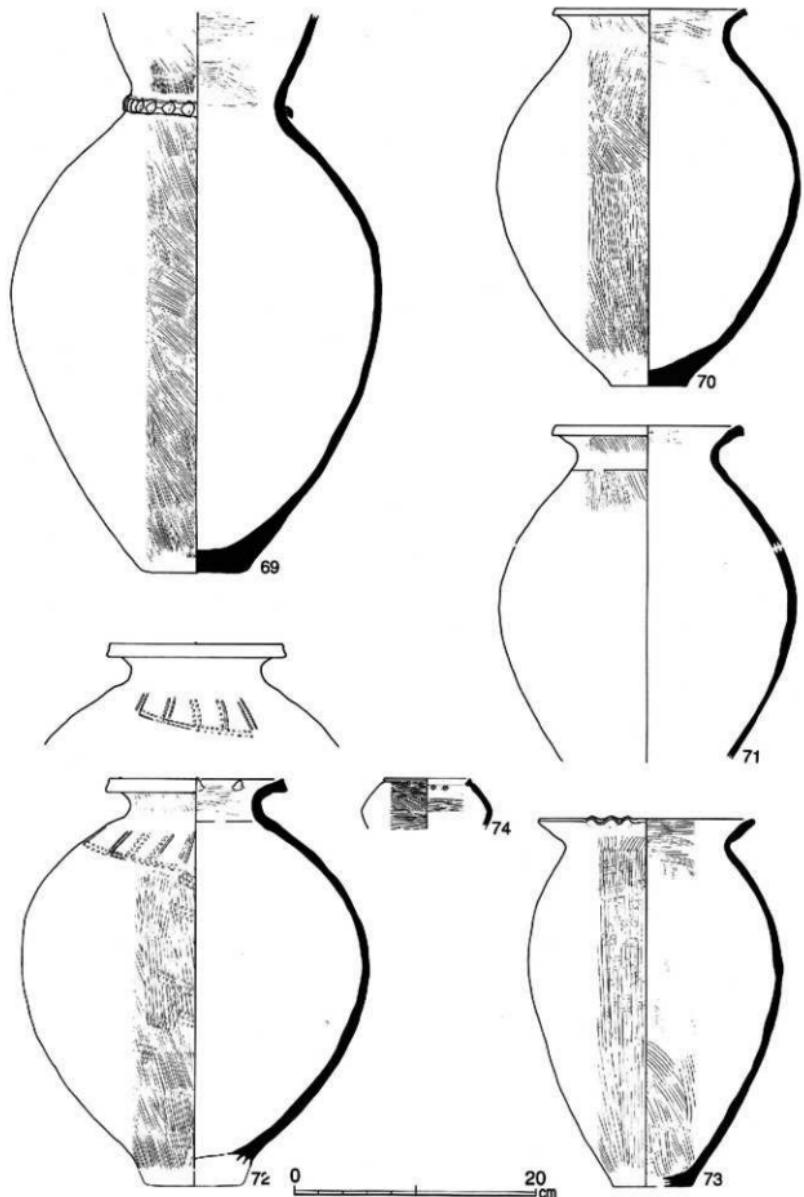


图29 3号墓周溝出土遗物 (S=1:4)

テ調整だが、わずかにヘラケズリのあとをとどめていた。くの字に開く口縁部は内外面ともハケ調整が施されている。84は東海系の甕。色調は黄色みを帯びた灰白色であるが、能勢地域では類例のない胎土である。その器壁は極めて薄く仕上げられている。外面には特徴的なハケ調整が加えられており、S字に立ち上がる口縁部外面には、櫛状工具によって刺突文が加えられている。内面は基本的にナデ調整であるが、わずかにケズリの痕跡が認められ、口縁部と胴部の境には粗いハケメ状の調整痕をとどめる。85は布留式土器である。器壁はかなり薄く仕上げられており、シャープな印象の土器である。色調はかなり白っぽい黄灰色で、精良な胎土が用いられている。外面には細かいハケ調整を行い、内面はていねいに削る。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げられている。

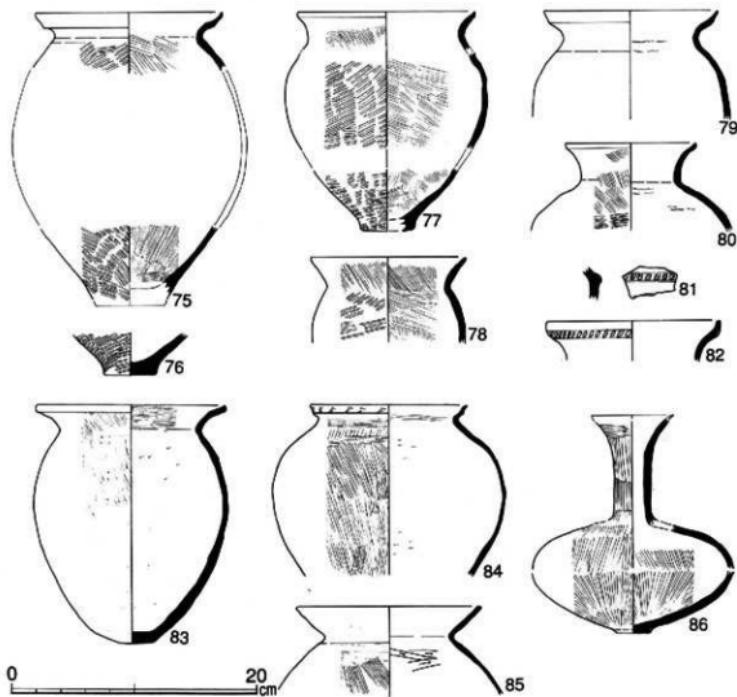


図30 5号墓周溝とその周辺の遺構出土遺物 (S=1:4)

## 第2節 古墳時代の遺物（岡崎4号墳出土遺物）

1 須恵器（図23 24~28・32~38、図31、図32 128~142、図33 図版19・23~26）

蓋 杯（図23 24~27、図24 87~108） 蓋の形態はおおまかに、1) 24や89のように稜がはっきりしているもの、2) 90のように稜がはっきりしなくなるもの、3) 98のように口径が矮小化して稜が消えてしまったものに分けられる。

つぎに、杯の形態はおおまかに、1) 99のように立ち上がりのしっかりしたもの、2) 103のように立ち上がりが内傾化するもの、3) 108のように口径が矮小化して立ち上がりがさらに内傾化するものに分けられる。これら形態の変化に時期差が反映しているとみられる。胎土・色調も数群に分けることができるようだ。形態のよく似たものが、同じような胎土・色調である傾向を指摘できるが、しかし、つぎに述べる高杯の傾向ほどは顕著ではなかった。

高 杯（図23 26・28、図31 109~127） みつかった高杯はすべて有蓋高杯であった。

蓋の形態はおおまかに、1) 109のように稜がはっきりしているもの、2) 26あるいは113のように稜が消えて丸くなったもの、に分けられる。

杯はおおまかに1) 短い脚台でその裾が外側に巻き込むもの（119~123）、2) 短い脚台でその裾がそのまま丸いもの（28・124~127）。3) 長い脚台であるもの（117・118）、の3つの形態に分けられる。色調は形態に対応するが、とくに1と2がはっきり識別でき、1は青味を帯びた灰色、2は小さな黒色粒を含んでかなり白っぽい灰色である。1にはやや焼成不良気味の個体があるが、2にはそのようなものはみられない。調整にも1と2では異なる要素があり、例えば2の杯部見込み中心には、いずれも回転ナデ調整の最後になで上げたあとがはっきり残っていた。

高杯は蓋杯と比べて形態や色調、調整にははっきりとした違いが認められ、形態と色調がそれぞれ対応する傾向を指摘できる。

提 瓶（図23 32~34・141・142） 把手の部分の形態から1) 完全に環状であるもの、2) やや退化して突起状になったもの、3) さらに退化して円形浮文状になったもの、もししくはなにもないもの、に分けられる。

壺とその蓋（図23 35~38、図32 128~139） おおまかに口縁部の形態で1) 外反気味に開くもの（35・36・135・136・138・139）、2) 短く直立するもの（37・130~133）、3) その他（38・134・137）に分けられる。

1) は総じてあまり肩の張らないプロポーションである。が、細かいところのかたちはバラエティに富む。口縁端部は肥厚するものや面を持つものなどがある。叩き目はほとんど消されているものばかりであったが、35のみ比較的軟質に焼かれており、体部外面には叩き目が残っていた。また、136は内面の同心円状タキが顕著に残る。外面の調整は、カキ目を主体とするものとナデを主体にするものに分かれる。一方、2) は肩の張るプロポーションが主体である。内外面ともナデ調整が施されており、叩き目やカキ目の残る1) とは対照的である。そのような要素を加味すると、134もここに含めた方がよいのかも知れない。1)、2) とも胎土や色調にはばらつきがあり、高杯のようにそれらが器型や調整に反映してはいないようだ。また128・129は壺の蓋であるが、どの個体と組み合うのかは不明である。

**器 台** (図32 140) 高さ50cm近くある優品である。杯部は口縁端部をやや外反気味にして面をつくる。外面上半部はナデ調整で下半部はカキ目や叩き目が残る。脚台部はその中央でこし膨れているのが特徴で、裾端部は内弯しながら広がる。裾部まで含めて沈線によって8つの区画に分けられており、それぞれの区画に細かい櫛描波状文が施されている。各区画の三方に長方形のすかしを穿つが、裾部のそれのみは三角形である。

精良な胎土で杯部は青みがかった灰褐色に焼き上がっているが、いっぽう脚台部の広い範囲に焼成不良が認められ、外面の器壁が剥離している。

**壺** (図33 149・150) 149は器高50cm、150は器高40cmを越える。どちらもやや肩の張るプロポーションで、短く外反する口縁端部は丸くおさめている。体部外面は仕上げにカキ目を施すが、成形時の平行叩きは明瞭に残っており、とくに150でいわゆる叩き縮めの円弧が顕著に認められる。色調はいずれも青灰色で硬質に焼かれている。

## 2 土師器 (図23 29~31、図32 143~148、図版19・26)

**杯** (29・30・143・144) 143のように丸い感じのものと、144のようにやや腰の張るものがあるが、個体差の範囲と考えられ、基本的には同一の器型であろう。色調は赤橙色である。風化が進み、調整は不明瞭である。

**高杯** (31・145~148) 上述の杯に、低い脚台を張り付けたもの。脚台の裾部は短く外反し、その端部は丸くおさめている。145はその脚台が接合部からはずれてしまっている。杯と同様、風化が進み調整がよく判らないものが多い。そのうち147は外面すべてと杯部内面にヘラミガキがあり、また148の杯部下半部には横位のケズリ調整が認められた。

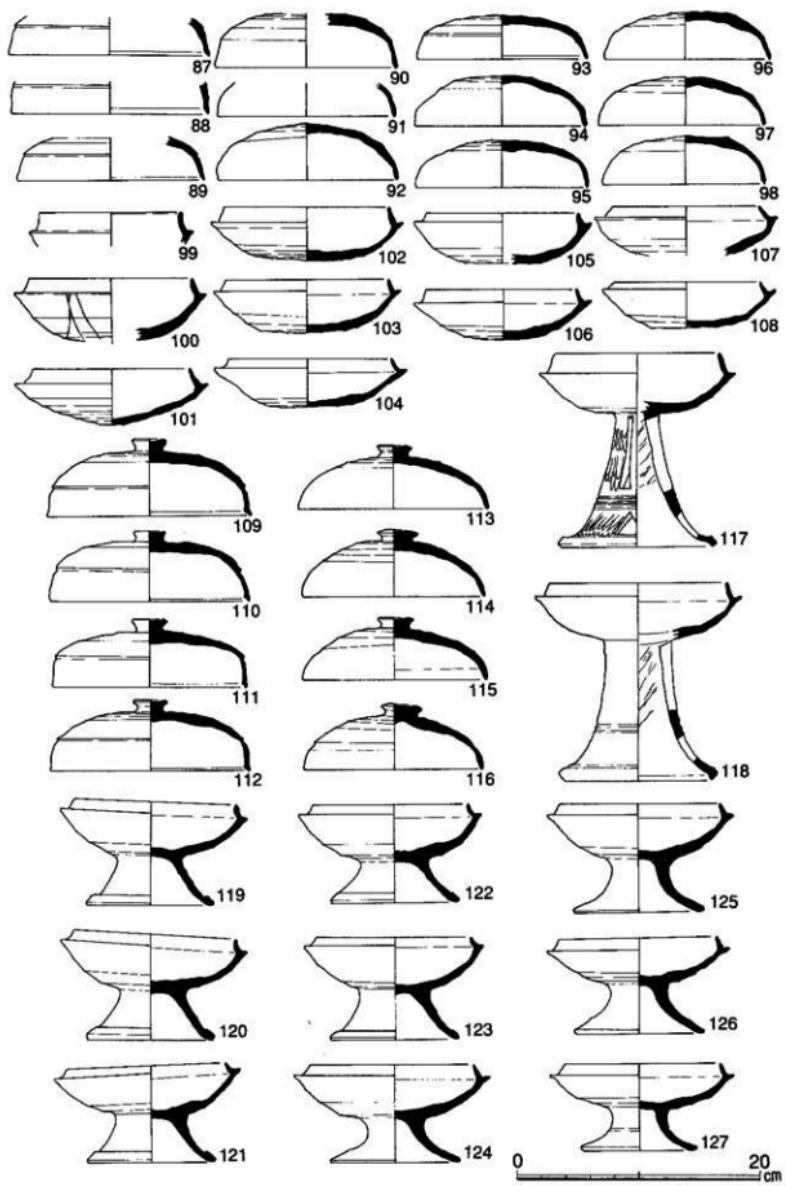


図31 岡崎4号墳出土遺物1 (S=1:4)

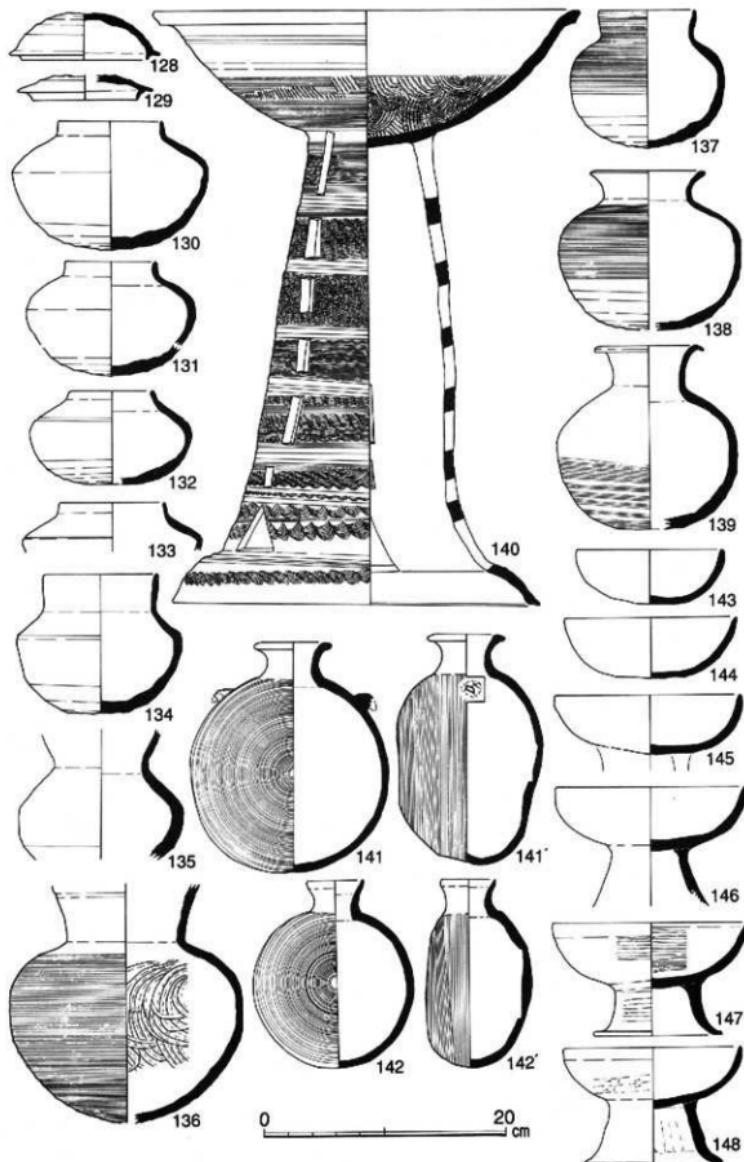
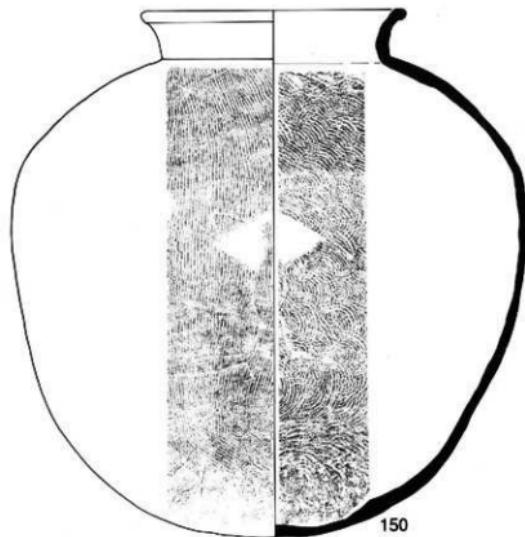
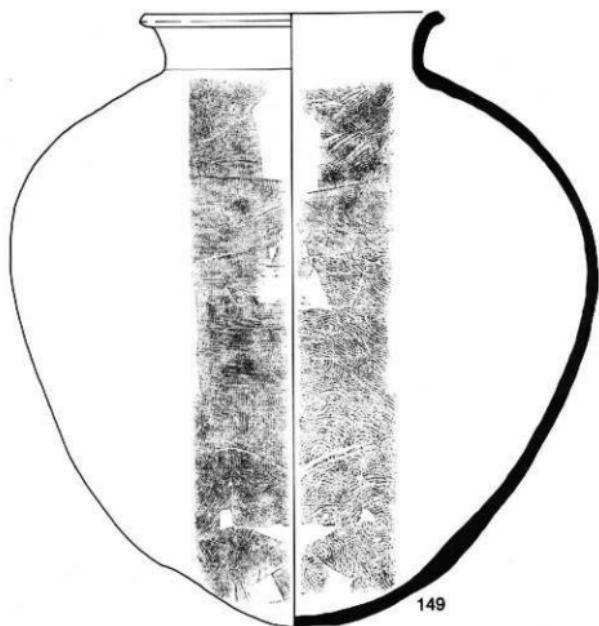


図32 岡崎4号墳出土遺物 2 (S=1:4)



0  
20cm

図33 岡崎4号墳出土遺物 3 (S=1:4)

### 第3節 鎌倉時代の遺物

配石造構間連出土遺物（図34 151～179；図版27）

瓦器（151～160） これらは、Dc区土坑17に取り付く墓道（？）と思われる溝状造構から見つかったものである。すべてⅢ期の丹波型瓦器焼で、時期幅は大きくなれど能勢地域において13世紀後半に比定できる資料ばかりである（註）。口縁端部はやや肥厚し、体部は内湾気味に立ち上がる。断面三角形の小さく低い高台が付されるが、口径に比べて底径は大きい。細いヘラミガキは内面のみに見られる。

古銭（161～176） Jd区土坑15から見つかった。全部で16枚ある。161は開元通寶（初鑄621年 唐）。162は乾元重寶（758年 唐）。163は天祐通寶（1017年 北宋）。164は天聖元寶（1023年 北宋）。165は天聖元寶（1023年 北宋）。166は皇宋通寶（1038年 北宋）。167は不明瞭だが皇宋通寶（1038年 北宋）と思われる。168は治平元寶（1064年 北宋）。169は熙寧元寶（1068年 北宋）。170は元豐通寶（1078年 北宋）。171は元豐通寶（1078年 北宋）。172は元祐通寶（1086年 北宋）。173は元祐通寶（1086年 北宋）。174は不明瞭だが紹聖元寶（1094年 北宋）と思われる。175は元符通寶（1098年 北宋）。176は政和通寶（1111年 北宋）。

鉄釘（177～179） Jd区土坑15から見つかった。断面四角形で一方を尖らせ、他方をわずかに鈎形に曲げて頭とする。棺に使用されたものと考えられるが、178は真っ直ぐで177と179は尖端より約1/4ないし1/3のところが曲がっている。いずれも178よりも長い部分のみが曲がっていることから、原因として板材の厚みが関係しているのかも知れない。

（註）重金 誠 「能勢の古代末・中世前半土器の再検討」（『大里遺跡発掘調査報告書』1993 能勢町教育委員会） 同 「回転台土師器についての一考察」（『中近世土器の基礎研究』IX 1994 日本中世土器研究会）

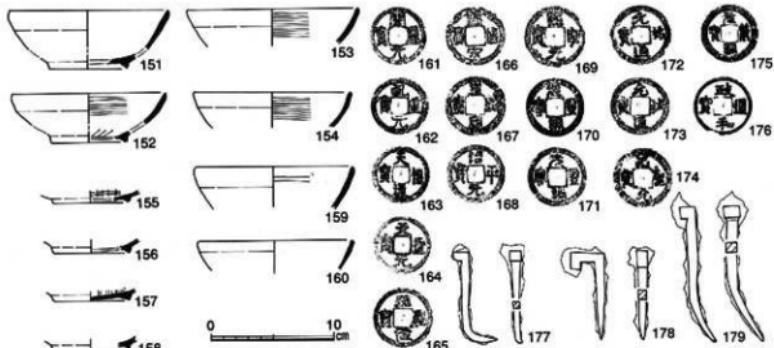


図34 配石造構間連出土遺物

## 第5章 まとめ

### 第1節 検出した遺構群の変遷（表1）

今回の調査で検出した遺構群は、重複関係や方位、出土遺物の年代観からみてI～IV期の4つの時期に区分できる。

I期 弥生時代中期から後期にあたる。前半と後半に分けられる。

前半 弥生時代中期にあたり、方形周溝墓4基（1～4号墓）を検出した。これら周溝墓は眺望のあまり良くない尾根の奥まったところにつくられる。

後半 弥生時代後期にあたり、方形周溝墓1基（5号墓）とその脇で土坑（Fe区土坑10）やピットを検出した。この墓は中期につくられた周溝墓と重複していない。このことから造営時には中期の方形周溝墓が残っていたことは明らかで、それらを避けようとした意識が働いたことを窺わせる。また、墓の脇にある土坑やピットは堅穴住居跡であった可能性が高い。

II期 古墳時代後期にあたる。方形周溝墓の造営が途絶した後、やや時代を経て最も眺望のよい場所を選び横穴式石室の円墳（岡崎4号墳）がつくられる。なお今回の調査区から尾根を降った場所には3基の古墳があり、本古墳とそれらをあわせて岡崎古墳群が形成される。

III期 奈良時代にあたる。岡崎4号墳の脇に古墓（Id区小石室）が営まれる。

IV期 鎌倉時代にあたる。散発的に火葬が行われた模様で、関連遺構（Dc区土坑17・Ec区焼土坑・Jd区土坑15）が形成される。しかし、墓地としては機能しなかった模様である。

### 第2節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土器類、石器、古錢などがある。

弥生時代中期の土器 1～4号墓までの方形周溝墓の主体部や周溝内から出土した土器は、

I期		II期	III期	IV期
前半	後半			
1号墓	5号墓	岡崎4号墳	Id区小石室	Dc区 土坑17
2号墓	Fe区 土坑10			Ec区 焼土坑
3・4号墓				Jd区 土坑15

表1 主要遺構時期別一覧

摂津平野部からの搬入品とみられる壺（5、39、62～64）や水差（67）、高杯（68）などの年代観や63・64・67で確認される凹線文を手がかりに、概ね畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の間に収まるものと見られる。以外は在地色の強いもので具体的な時期の決め手に欠ける。現段階ではそれらの年代観は共伴した搬入品と基本的に一致しているととらえておきたい。

在地産土器群の特徴を簡単にまとめておく。まず第一に土器を飾らない。畿内中心部で装飾性の強い器種、例えば壺に対しここ原田遺跡ではほとんど施文されないのである。たとえば形態から壺とみられる49、61、70などは外面にタテハケを施しただけである。第二に回転台の不使用。中期の施文法を特徴づける要素の一つは回転台の使用であるが、描绘文を施した土器の中には回転台を用いられた形跡がないもの（51）があった。第三に典型的凹線文の欠落。第Ⅳ様式に顕著ないわゆる典型的凹線文は全く見られなかった。

以上のような技法上の特徴と共に、さらに付け加えるとそれら在地の技法がプロポーションにも影響しており、全体にシャープさに欠け重々しい印象を受ける。

土器から見た1～4号墓の造営順序　造構の切り合いや出土土器の形態・調整の差違から、各周溝墓の相対的な時間差はある程度の類推が可能である。この際、墓の造営順序についても見通しを述べておく。

①1号墓出土土器には凹線文を伴う土器が見いだせなかった。また、プロポーションは最大径が体部の中央より上にある。これらのことから、弥生時代中期でも凹線文出現以前の段階と考えられる。最も初期の土器群と捉えておく。

②2号墓出土土器には凹線文を伴う土器が多い。プロポーションは最大径が体部の中央付近に降りてくる。周溝の切り合いからも1号墓の上器よりは新しい土器群と見られる。

③3号墓出土土器は在地産土器を中心であり時期決定の決め手を欠く。壺（72）は成形技法にタキギが見られ、プロポーションに反映している。無頸壺（74）は無文であり口縁部が肥厚しない。これらの特徴はどちらかと言えば後期的な要素であると言えないだろうか。

以上の点から推して、中期の方形周溝墓は1号墓、2号墓、3・4号墓の順に造営されたと考えておきたい。

## 報告書抄録

ふりがな	はらだいせきはくつらようさほうこくしょ
書名	原田遺跡発掘調査報告書
副書名	弥生時代中・後期の方形周溝墓と古墳時代後期の古墳の調査
卷次	
シリーズ名	能勢町文化財調査報告書
シリーズ番号	第10冊
編著者名	重金 誠
編集機関	能勢町教育委員会
所在地	〒563-0392 大阪府豊能郡能勢町宿野29番地
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
はらだいせき 原田遺跡	おおさかふとよめぐんわせちょうくらがき 大阪府豊能郡能勢町倉垣	27322	34° 58' 45"	135° 28' 20"	1992年 5月～6月	3,000	宅地造成工事
岡崎4号墳					1995年 7月 ～11月		
吉野古墳群					1997年 4月～ 1998年 3月		
浜湯場古墳							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原田遺跡	その他の墓	弥生時代	方形周溝墓	弥生土器	丘陵上に當まれた 方形周溝墓群。
岡崎4号墳	古墳	古墳時代	木棺直葬墓	須恵器	墓壙内破碎供獻土器。
吉野古墳群	古墓	奈良時代	横穴式石室	土師器	方形周溝墓主体部から 磨製石剣出土。
浜湯場古墳		鎌倉時代	小石室 配石遺構 (火葬開通施設)	土製品 石器 古銭	東海系土器(S字形口縁型) の発見。

図版 1  
遺跡  
調査地

調査地全景  
(北から)



調査地を  
のぞむ  
(東から)



調査地を  
のぞむ  
(南から)



図版2  
遺跡  
1号墓1



1号墓全景  
(南から)



1号墓全景  
(完掘後)



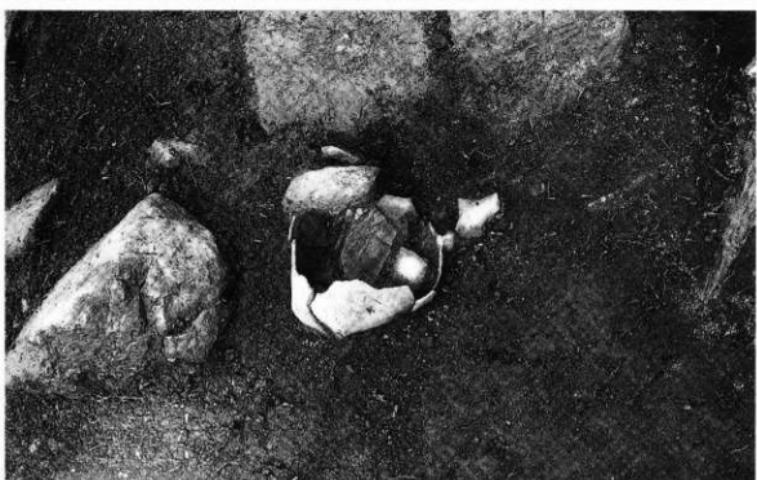
1号墓周溝内  
SK29  
遺物出土状況

図版 3  
遺跡  
1号墓 2

1号墓周溝内  
土器出土状況



同上

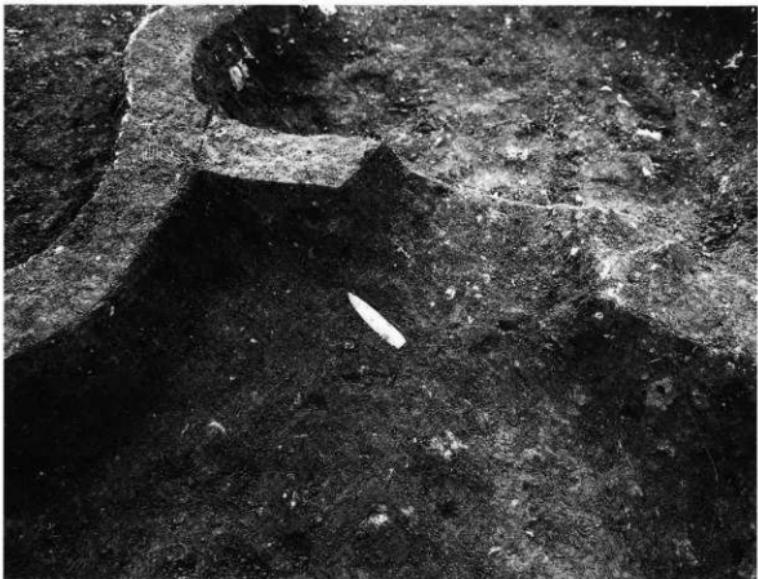


同上



図 版 4  
遺 跡  
1号墓 3

1号墓  
第1主体  
遺物出土状況



同 上



1号墓墳丘  
上面の集石



図版 5  
遺跡  
1号墓 4



1号墓  
第6主体(左)  
第7主体(右)

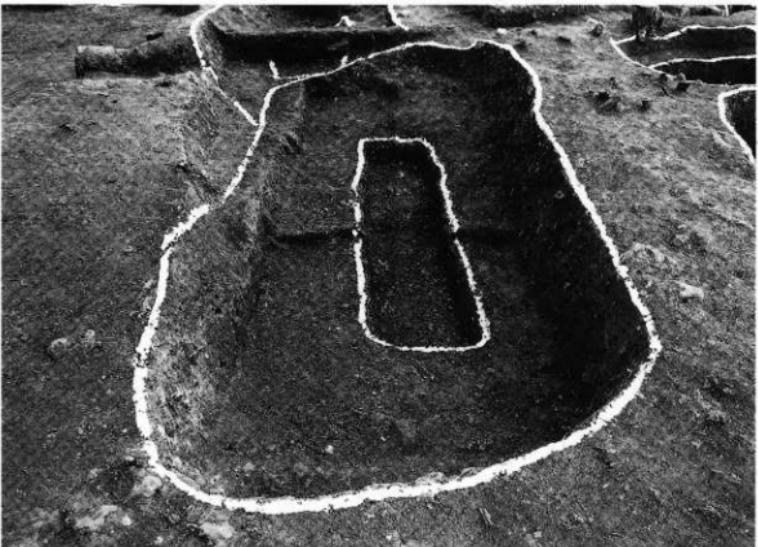


1号墓  
第6主体

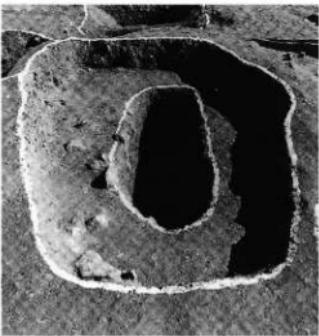


1号墓  
第7主体

図版 6  
遺跡  
1号墓 5



1号墓  
第9主体



1号墓  
第11主体 ◀  
調査風景 ▶



1号墓  
第12主体

図版 7  
遺跡  
1号墓 6



1号墓  
第13主体

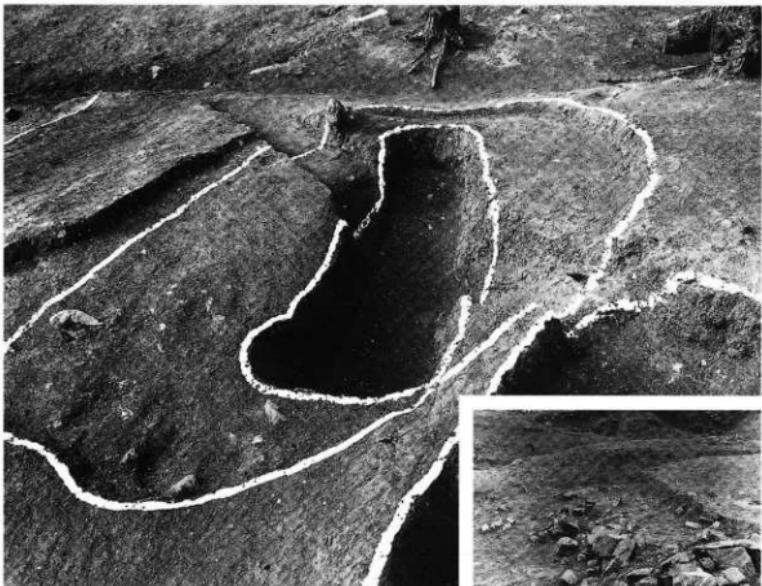


1号墓  
第14主体  
土器検出状況



同上  
細部

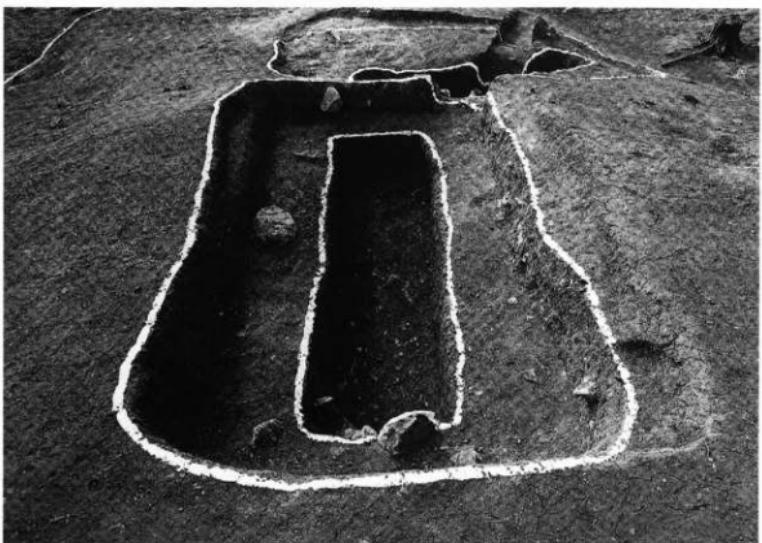
図版8  
遺跡  
1号墓7



1号墓  
第18主体



1号墓周溝  
連接部にみえる  
岩脈の露頭



1号墓  
第17主体

図版 9  
遺跡  
1号墓 8



1号墓  
第16主体  
土器検出状況



同上  
細部 ◀▶



1号墓  
第15主体

図版 10  
遺 蹤  
2号墓 1



2号墓周辺  
(西北から)



2号墓  
全 景



同 上

図版 11  
遺 跡  
2号墓 2

2号墓周溝内  
土器出土状況



同 上  
細 部 ◀ ▶



同 上  
細 部 ◀ ▶



図版 12  
遺跡  
3号墓



3号墓周溝  
完掘状況  
◀



▲  
3号墓周溝  
土器出土状況



3号墓  
主体部 ▶

図版 13  
遺跡  
5号墓

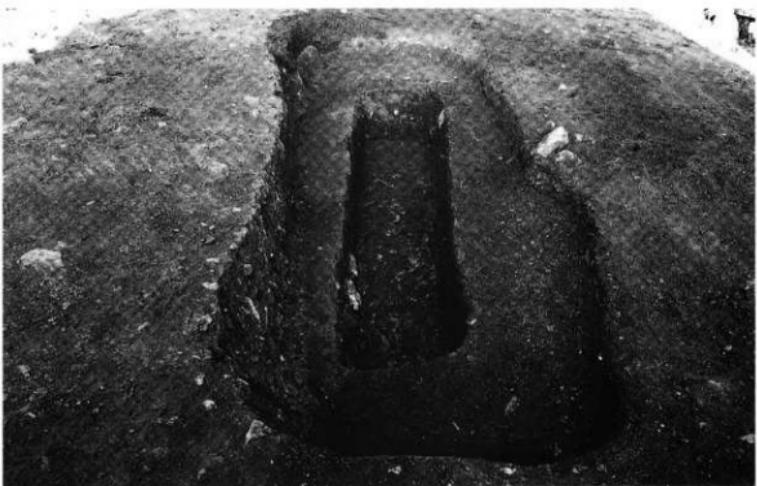
5号墓  
全 景  
(南西から)



5号墓  
石上部  
列同細  
▲ ◀  
▶ ▾



5号墓  
主体部  
(南西から)



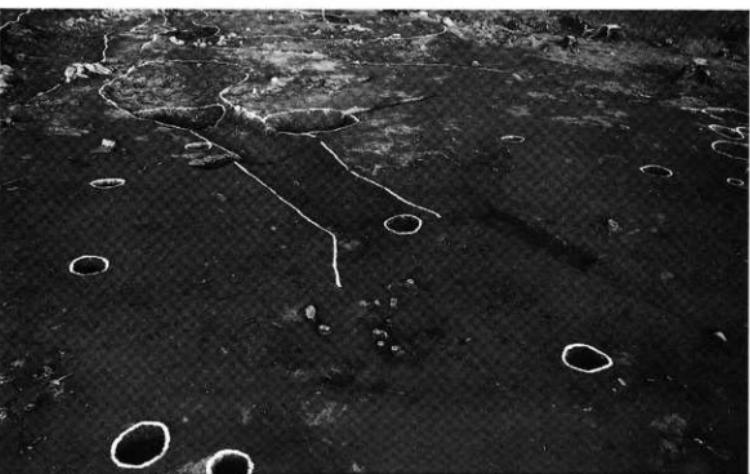
図版 14  
遺跡  
5号墓周辺



調査区北部  
全 景  
(南から)



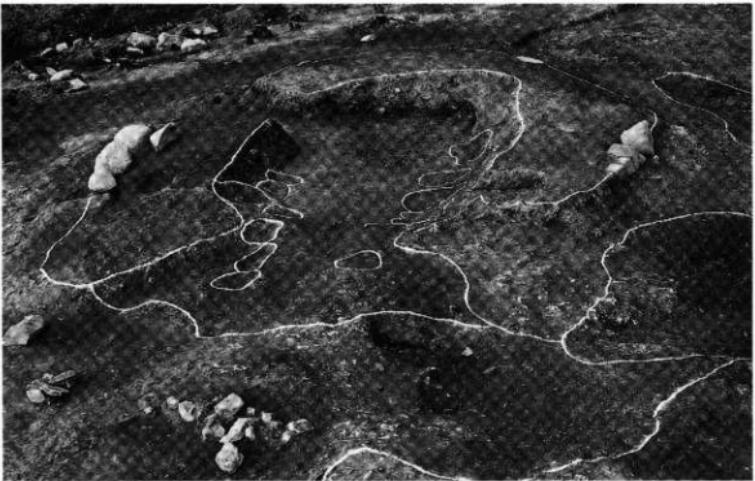
5号墓南西  
ピット群



5号墓南西  
堅穴住居状遺構  
(南から)

図版 15  
遺 跡  
岡崎4号墳

岡崎 4 号墳  
全 景



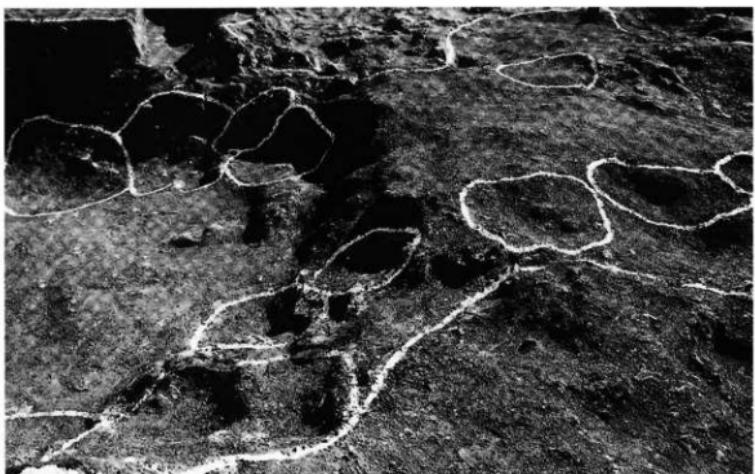
墳丘外護列石  
(東側)



墳丘外護列石  
(西側)



玄門部に  
見られる段



図版 16  
遺 跡  
奈良時代古墓



Id区 小石室 完掘状況（南から）



同（西から）



同（東から）

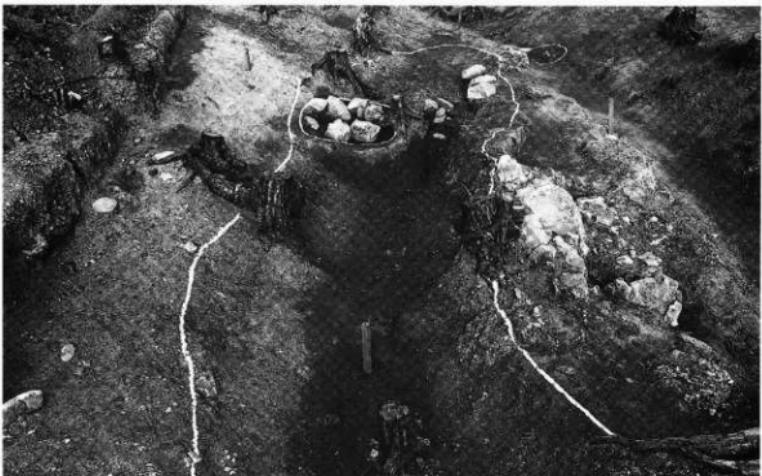


同 細部



同 細部

図版17  
遺跡  
配石遺溝



Jd区土坑15  
付近全景



Jd区土坑15  
完掘状況



Dc区土坑15  
完掘状況

図版 18  
遺 物



原田遺跡 弥生時代周溝墓 出土土器



岡崎4号墳 出土土器

図版 19  
遺物  
試掘調査



4



5



28



29



31



35



36



37



32



34

図版 20  
遺 物  
弥生時代  
の遺物 1



39



46



48



50



49

図版 21  
遺 物  
弥生時代  
の遺物 2



51



53



56



56'



58



60

図版 22  
遺 物  
弥生時代  
の遺物 3



61



68



72

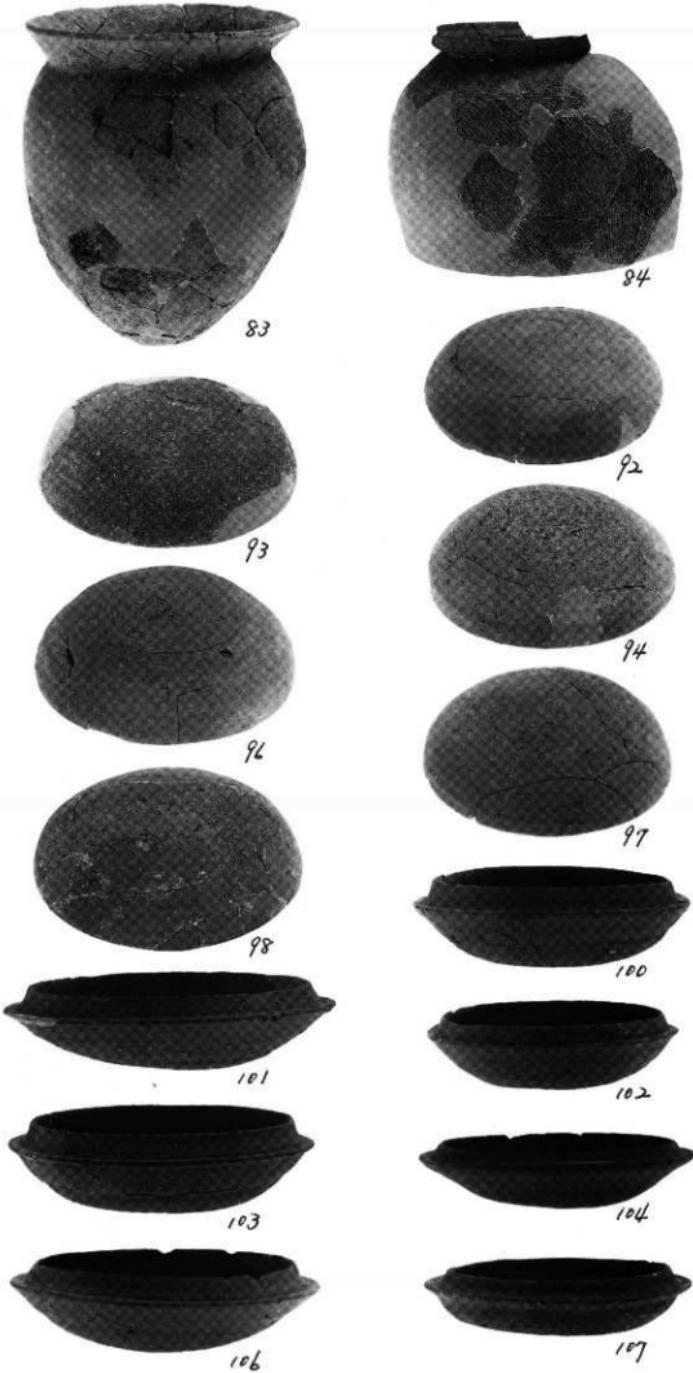


69



73

図版 23  
遺物  
弥生時代  
の遺物 4  
古墳時代  
の遺物 1



図版 24  
遺 物  
古墳時代  
の遺物 2



図版25  
遺物  
古墳時代  
の遺物3



124



125



126



127



130



134



136



137



138



139

図版 26  
遺 物  
古墳時代  
の遺物 4



141



149



142



150



147



143



140

図版 27  
遺 物  
石 器 ·  
土 製 品 · 錢



45



44



51



52



53



54



165



164



163



162



161



170



169



168



167



166



176



175



172



173

## 原田遺跡発掘調査報告書

能勢町文化財調査報告書 第10冊

---

発行日 1998年3月31日

編集発行 能勢町教育委員会 社会教育課

住所 大阪府農能郡能勢町宿野29番地  
■563-0392 TEL 0727-34-0001

印刷 今仲印刷所

